

万象 平成十四年十一月十三日第三種郵便物認可
令和三年四月一日発行（毎月一回一日発行）
第二十卷 第一号（通卷二二九号）

万象

BANSYO

四月号

2021. 4



四月の句

舟積んでトラック通る桜かな

葛井早智子

京都観光の定番、保津川の舟下りを思い浮かべる情景である。

スリル満点の溪谷美を楽しみながら、嵐山の渡月橋まで下った舟は、トラックに積まれ、川上の出発地亀岡まで戻されるのだ。沿道の桜がちらほら散りかかり、心地よい風があたかも労いの言葉をかけるかの様だ。

桜の頃、一度は訪ねてみたい観光地であり、楽しみたい舟下りである。

(島田和枝)

令和三年

四月号

万象

BANSYO

遠い国へ旅するに
書物にまさる船はなく、
駆けめぐる詩の本の
ページにまさる駿馬なし。

「本」エミリー・デイキンソン

(福田昇八訳)

万 象

令和3年4月号

主宰作品 雛飾る	内海 良太	4
副主宰作品 松過ぎ	小林 愛子	5

風 音 集

江見悦子・柳澤宗正・山田春生
福島せいぎ・内藤恵子

続・万象と共に ⑤ 鐘の話	内海 良太	8
---------------	-------	---

同人作品

内海良太選	9
-------	---

俳句カレンダー掲載句自註	神田美穂子	31
--------------	-------	----

同人作品の佳句	内海 良太	33
---------	-------	----

北海道支部 コロナ禍で電子メールを活用	濱谷 和代	34
---------------------	-------	----

新潟県支部 白玉の春	高橋 ひろ	35
------------	-------	----

静岡「季節風」苦手を克服	藤原千代子	36
--------------	-------	----

金沢「あかね句会」継続を力に	石川 純子	37
----------------	-------	----

新年特集

風 花	横川 良子	38
-----	-------	----

同人特別作品

石神井城址	下嶽 孝一	39
-------	-------	----

新同人競詠	入山繁幸、売野 緑、大林彬彦、岡村純子、草間三香子	40
-------	---------------------------	----

謝花寛宮、砂地宏子、中鉢弘一、平岡 功

特別作品評 (二月号)	榎本 文代	43
-------------	-------	----

飛高隆夫自選句鑑賞⑭

去年今年銀河鉄道乗車中 三屋 英俊
山茶花を咲かす力がまた散らす 瀨谷 和代

福島せいぎ・内藤恵子自選句鑑賞⑫

旅人の我も水浴び仏誕会 せいぎ 柳澤 宗正
師を送る時雨雲より青き空 恵子 江見 悦子

同人作品評(二月号) 林 陽子

万象招待席 冬 晴 飯塚 キミ
豊後の旅 坂本 具子

万象招待席評 谷渡 末枝

万象ノオト「鏡」 長谷川秀子、島崎洋、瀬野喜代子、馬場美智子、小坂橋泰山、柳澤道子

俳書探訪 古川 京子

巻頭作家(三月号)プロフィール 佐藤幸示(新潟) 佐藤 雄二

万象作品

小林 愛子選

万象作品の佳句 小林 愛子

同人会便り 同人会の今後について／珈琲ぶれいく⑪ 柳澤 宗正

「万象」同人句会報(二月例会に替えて通信句会)

万象基金のご報告

東西南北

雛飾る

内海

良

(主
宰) 太

人日の庭に焚火の跡匂ふ
はじめから傾いてをりどんど焼
麦の芽や筑波風が畝に這ひ
常陸野や朧の中の峰二つ
お仕舞は箆を逆さに節分会
古衣屋の主が言へり茂吉忌と
が佐原ららんだうの忠敬旧居雛飾る

松 過 ぎ

小 林 愛 子

(副主宰)

あらたまの日を受く庭の枯葎
扉の開いて稲穂の揺るる掛飾
子等去りて齒を磨きゐる二日かな
赤海鼠いや黒海鼠押して買ふ
日と睦む張出し窓のヒヤシンス
松過ぎの鈍色一枚空と海
老人に老人の夢冬火花

風音集



シクラメン

江見悦子
(編集人)

豊頬の鳥毛立女や花びら餅
遠き灯のにじむ川面や曇くる
純子句碑肩まで加賀の深雪かな
ほとばしる富士の湧水芹生ふる
春近き空にまたがり足場解く
籠り居の朝薄紅シクラメン

初山河

柳澤宗正
(同人会会長)

枝移るふくら雀や古戦場
笹鳴や友の訃報がまた一つ
オンライン吟詠終へて年忘れ
白々と月の沈みて初山河
摺り足に赤みのさして初稽古
大輪の寒菊居間を明るくす

大 旦 山田 春生

(願問)

天心を月渡りゆく去年今年
長生きは得とおもふや初日の出
遙かなる富士まで晴れて大旦
初夢に名句浮かびて目覚めけり
寒晴や甲斐の山々頭をそろへ
左右に積む読みたき本に日脚伸ぶ

初日浴ぶ 福島せいぎ

(願問)

滾るもの身ぬちにありて初日浴ぶ
濃墨に水滴らす初硯
初夢の船に乗りたるところまで
狐火や阿波一の宮闇の中
大寒や練りし朱肉の油浮く
教へ子の十日戎の飴を売る

青夜空 内藤 恵子

(願問)

冬萌のはこべら朝日散らしけり
横向きに真鴨流るる巴波川うずまがわ
いと細き冬の三日月青夜空
枯芦へ沼の夕日の帯とどく
満ち潮の波に紛れし夕千鳥
風呂吹を煮上げし夜の風の音



鐘 の 話

内 海 良 太

松過ぎの8日、遅ればせながら近くの天台宗・瀧水寺へ初詣に行った。
畑に囲まれた中のこぢんまりした古刹で、建武5年刻銘の小さな梵鐘がある。撞木は普段外さ
れているが、今年の正月は参詣人が自由に撞けるようにと、取り付けられてあった。

疫病退散の願いを込めてお撞き下さいということだろう。

私も疫病退散を願って遠慮がちに撞いてみた。鐘は口径60センチ程の小型、鐘の音はやや高め
だったがいい音だった。もう少し強く撞いてもよかつたかなあ、などと反省。

梵鐘や半鐘等は遣唐使の時代に唐から寺院建築の技術と共に輸入された。また朝鮮半島からも
大量に入ってきた。寺の鐘は仏事一般や時報に、町の鐘は時報や警鐘などで活躍した。江戸八百
八町の古地図には十数カ所「時の鐘」として載っている。

蕪村の師、夜半亭末阿（早野巴人）は日本橋石町の「時の鐘」のほとりに住んでいた。

夜半亭の号は「夜半ノ鐘声」（註）「客船」の漢詩に由来するという。〈花の雲鐘は上野か浅草か
芭蕉〉は寺と時の鐘。川越の蔵の街には「時の鐘」が残る。今日の県庁舎や市庁舎には洋鐘（ベ
ル）を設置しているところが多い。

カミュの小説「ペスト」にアルジェリアのオラン市の庁舎の鐘が喜びに鳴り響く場面がある。ペ
ストが漸く終息し、ロックダウンが解除され、市の門が開いたのである。

広場という広場では喜ぶ人々が抱きあい踊りあい、市庁舎の鐘が一日中高々と鳴り響き、港で
は花火が次々と打ち上げられた。

新型コロナウイルス終息の暁には、世界中の庁舎は勿論、寺院や教会の鐘が鳴り響くかも知れ
ない。一日も早くこの日の来るのを皆が待っている。

余間（一茶七番日記より）。文化8年4月、小林一茶が冒頭の瀧水寺を訪れたとき、梵鐘の年号
に疑問を呈した。建武は2年までで、建武5年は無い筈だと。

同人作品

内海良太選



○は佳句に選ばれました。

札幌 松原智津子

初松籟神域に入る登り坂
独り住み御慶ねんごろ仏壇に
形見分けの春着の袖に香袋
雪時雨中尊寺への杉林
夕さりつ方底冷えの光堂

札幌 岡本敬子

手を合はす古老サイロに初日かな
○新雪の蒼き道には蒼き翳
ペンギンの歩幅凍て道歩く日は
冬だけの農家が造る通学路
子どもらと同じソプラノ初すずめ

札幌 濱谷和代

一湾を埋む流水またたく間
流水原ガリンコ号の水脈紺青
裸木の枝のあはひの落暉かな
雪時雨水面に滲む運河の灯
探梅や秋篠寺の一人旅

札幌 大内和憲

爆ぜるごと雪を散らせり椋鳥の群

灯を煌と雪の闇より発電所
一番機の窓の数だけ流水原
横切れる寒禽を追ふ羽音急
寒林の闇押し出せる終電車

札 幌 紅 露 恵 子

数へ日や頼りに小さき「草曆」
○年の暮厨の時計受信中
輝ける地平のサイロ淑氣満つ
縮緬の端布を選びて針始
裏打の石州和紙や寒の水

札 幌 大内マキ子

年輪をきざむ笑顔の初鏡
群れ牛のこゑを寄せ合ふ雪の中
尺の雪降らせて月の瘦せゐたり
雪積みて星へ近づく足がかり
○荒縄の端囀んでゐる初氷

札 幌 落 合 裕 子

菰卷のやさしく稚を抱くごと
御札受く今年は早き年用意
節操なきウイルス恐れ冬籠

東雲の月細りゆく寒さかな
朝の窓木立模様
に霜の花

札 幌 中 鉢 弘 一

瑞雲より射したる日矢の扇状に
網に依り上り参道初詣
晴れ渡るものみな眩し二日かな
かまくらの小さき間口や子が一人
着ぶくれの子はペンギンの歩みして

江 別 佐 藤 哲

面会のコロナ禍かなし雪時雨
わたり来る風のざらつく大枯野
葉の落ちて木にふつくらと冬芽満つ
日当ればしづくの音のみ大氷柱
ひび割れしどぶろく鍋や大食ひす

苦 小 牧 林 陽 子

白鳥の影の重なる夕間暮れ
しまく夜の早寝BGMはボサノバで
ダイヤモンドダスト鏝め残る月
枯蘆のあはひ朝日を取り込み
七種粥子は好物のチーズ足し

秋田 小松敏郎

海吠えてつぎつぎ育ち来る吹雪
鱈裂かれ深海の精さらしけり
吹雪く夜の棧のゆるみし木戸の音
○輪標踏み出す一步大股に
吹雪く中臨時停車の特急車

新潟 佐藤雄二

春雷や生命を削る隠れ酒
逝く年や熊とコロナを積み残し
○ぢぢばばのたつた四人の初句会
逆しまに長靴を干す日和かな
ここだけの話がめぐる囲炉裏ばた

新潟 高橋ひろ

羽繕ひ終へて臬小さくなる
消ゆるまで色淡きまま冬の虹
波音や雪の張りつく磯馴松
茶を淹るる自分のための女正月
残像は橙色に冬の雷
○葉を滑る音の前触れ雪落つる

南魚沼 森山曉湖

冬の蜂尻の縞目をひからする
○雪起し巻機山にはじまれり
荒星やいまにも落ちてくるやうな
深雪晴大きく座る八海山
杉古木身震ひをして雪落とす
出掛けむと予備のマスクをポケットに

益子 光岡れい子

落羽松の気根に咲ける霜の花
天心に月かうかうと去年今年
冬菜摘むまろき背ふたつ日を受けて
窓つつくふくら雀の眼のまろき
武者絵佩野州の風にあそばせて

芳賀 大村かし子

惜しみ無き陽光受くる三が日
収束の願ひの籠る賀状かな
スパイスを利かせカレーの四日かな
町閑散声おだやかな初鵜
○あかがりや流れ作業を三十年

宇都宮 阿久津勝利

御供への地酒提げ行く山始
襟立てて喫煙場所の寒さかな
風花の舞ふ薄ら日の神楽殿
○大白鳥飛来の汚れ落す湖
石山の発破の笈冬ざるる

栃木 上岡佳子

きらきらと渡良瀬川閑か初景色
草田男の色紙の筆勢初曆
明滅の航路の行方冬銀河
暖炉燃ゆ珈琲店のスロージャズ
日脚伸ぶ二千歩増えし歩数計

佐野 増田幸子

乗馬クラブ草の根方の霜じめり
並足に挑む少女のクリスマス
数へ日や貨車の往き交ふ東北線
入相の鐘しづかなるお元日
脂光る檜の木口四温かな

佐野 加藤季代

億年のなかの瞬の身初日浴ぶ

秒針のかちと決まれり去年今年

初曆句会予定に先づ丸を

○人麿の恋とられけり歌加留多

土手すべる子らに冬日の燦々と

佐野 鍋島広子

元朝の庭に立つ子に支へられ

コロナ禍や並ぶことなく初観音

初検診医師より元氣もらひけり

ほがらかな友より長き初電話

麦の芽の出揃ふ畑へ鴉群れ

佐野 阿部澄

飴色の切干に日の匂ひかな

一分にて済みたる受診年の暮

葉牡丹に校庭の砂吹き溜まる

○パソコンより向き変へ医師の御慶かな

遠男体山凍雲うすれゆく速さ

佐野 芝宮留美子

鵝色に冠雪映ゆる遠白根山

芯までも冷たき野菜朝日浴ぶ

○寒の夜や柱に亀裂走る音

句集読む冬日を部屋に追ひかけて
くれなるの寒木瓜とぼる灯のやうに

佐野 島田和枝

水仙を天明鑄物の鶴首に
去年今年月煌々と雲寄せず
七度の干支や初日を肅肅と
山の端にかかる残月三十三才
蠟梅や菜園場に日の和らげり

佐野 茂木弘子

賜りし八嶋の柚子や冬至風呂
小春日や馬場の端つこ猫過る
謙信の落とせぬ城の竜の玉
白鳥の浮寝や筑波山遙か
古墳へと冬菜畑の道借りて

佐野 売野 緑

今朝の霜女教師のジョギングす
罎入りの臼に冬蝶翅休む
寒梅や一番上に絵馬掲ぐ
天満宮蠟梅きらと日をはじく
水仙や参列できぬ姉の葬

足利 大木 茂

買替ふる対の三方年用意
スカイツリーの遠き明滅初茜
ビニールの仕切る札売り初詣
刃物売青首大根切つて見せ
瀬回しの砂利乾きみし川普請

土浦 澤 照 枝

○若菜摘畦に自転車寝かせ置く
神体の巨石注連取る氏子衆
二〇二一個の餅花生らす村総出
クレーンから咲かす餅花檜大樹

さいたま 山本 右 近

継ぎ接ぎに命つなぎて去年今年
句を詠むもこの顔ならむ初鏡
はつきりと妻の名を呼ぶ初寝言
早言の観世古式の謡初
○錦絵の祇園賑はふ蕪村の忌

志木 中村 千 久

青空に蠟梅は黄を散らしたる

我もまた周平ファンぞ読みはじめ
下草に裸木の影やはらかし
○時軸をとどめて滝の凍つるかな
独り居の何か足らざるおでん鍋

所沢 三好 かほる

弾初のパイプオルガン聖堂に
○朝市の寒芹一把したたりて
本棚に光雅画集春を待つ
ましら茸日に日に白し寒土用
新しき絵筆もて描くチューリップ

所沢 森岡 恵子

柚子の黄のゆらぎてやまぬ湯船かな
おとがひに寄せくる柚子の香り立ち
散り敷きてなほの彩り冬紅葉
枯れ極む芒の原に風さわぐ
真夜覚めて出会ふ人皆なつかしき

所沢 南雲 秀子

丑年のおだやかに晴れ初祓
初詣の人まばらなる小江戸かな
夕富士の影美しき枯野かな

わつと来てわつと飛び立つ冬の鳥
高麗川の流れ煌めく冬日中
入間 山口 素基

真つすぐに廊下のつづく寒さかな
数の子のうす皮を剥く年用意
元朝や今日の始まる鳥のこゑ
薩埵なる蜜柑山より初東雲
これはこれはと門口に御慶述べ

千葉 田中 道江

そぞろ寒はきだめ菊のかたまれる
熱爛やまたぎの身振り大仰に
指太きをんな初めの火をつかふ
若冲の鶏冠透きたり大初日
買初や山門際の唐辛子
○舟廊下を湖風わたる淑気かな

酒々井 竹澤 竹里

伊吹風兵どもの古戦場
筑波風大鷹連れてやつて来る
寒風にひらひら蛸の姿干し
南天を植えて目出度き鬼門除け

買初は馴染の店の栗羊羹

酒々井 中 嶋 久 登

ちば笑ひの神社詣でて初笑

多羅葉へコロナ禍記す大晦日

放ち飼ふ鶏の近づくなづな摘

深谷葱薄皮剥けば香の強き

朝日浴三橋殿女像ふ鷹女の顔の薄氷

佐介 内 海 保 子

初晴や沼は平らに天映す

初景色見んと眼鏡を拭ひけり

二天門等間隔に晴着の子

逆上り今日も挑戦日脚伸ぶ

寒北斗鳥獸戯画の寺の上

佐介 大内 佐 奈 枝

初炊ぎ水使ふ音きざむ音

人日や掘りつばなしの遺構なる

甘酒の甕まづ据ゑ飾焚き

遠き山ただ見てをりぬ懐手

鉢植ゑに寒肥と言ひ二三粒

佐介 三 屋 英 俊

蕪村忌や筆に化けたる黒狸

新玉の日影めぐりて我が庭に

遥拝の家居の空や初鴉

門付の瞽女の甚句や雪催

源氏名は小雪あの日の雪女

佐介 横 川 良 子

音立佐原てて樋橋が吐く寒の水

鳥どちに序列あるらし冬林檎

空濠の闇の深きも寒に入る

枯芦を分けて舟出す沼漁師

今日使ふだけの収穫冬菜畑

四街道 奥 太 雅

野仏に永き祈りの枯野人

妣のせし如く子供へ暮の荷を

煤逃の漢に漢会釈だけ

元朝の庭に紋付鳥来たり

脇路へ逸れる散歩や日脚伸ぶ

四街道 塗 木 翠 雲

たつぷりと初穀鋤ける大冬田

初御空昨日と違ふ空の紺
声色を使ひ分けたる初鴉
産土神の夜焚火爆ぜて年新た
花びら餅顔くしやくしやに笑みにけり

船橋 山下良江

冬三日月あの切先へ登りたし
わが影の底に沈める冬干瀉
冬干瀉くろがね繻は賑やかに
背高鳴冬の水面に脚折りて
シクラメンの茎養生の紙包帯

船橋 大山春江

家々の壁金色に初日出づ
鉄塔の間の初富士うす紅に
お正月いつもどほりの病院食
あをく透く冬満月の小さかり
風花や合掌造りの厚き屋根

船橋 赤堀洋子

薄明の流星群や冬の朝
初日待つ誰かれとなくこゑ交し
電線の鳩も並びて初日待つ

正月の垣根伝ひや尉鶴
貝塚の痕跡もなく冬菜畑

船橋 久保村淑子

厨の戸たたたく研屋や年の暮
四日はやシヨベルカー来て家毀つ
地底より冷気積み上げ寒に入る
枯色にまんさく冬芽ふくらめる
黒鉄繻寒風みがく真赤な実

船橋 片桐帆一

瑞垣に真つ朱に弾け海桐の実
青シート小屋根に年越す砂袋
残照に染まる一輪冬薔薇
足元の芝に弾みし寒すずめ
日向ぼこ真一文字に目蓋閉ぢ

船橋 宮本加津代

農道の轍そのまま霜柱

○白もまた色をつくして寒牡丹
おめでたう遺影に呟き年迎ふ
朱の椀に芹の緑の雑煮かな
柚味噌の匂ひるる手で子へ電話

柏 山本とく江

薄墨の富士くつきりと初日の出

雪吊の天辺密にむらすずめ

○鷹匠橋渡る木の香や恵方道

一木のふくら雀に濃き夕日

大寒やコロナ禍に閉づ「川甚」も

柏 松原三枝子

残照や冬三日月の早や上る

立春を待たず半藤一利逝く

臘梅の香りや閑伽の水をくむ

臘梅の花びら寒気丸くのむ

コロナ禍の寂や万両のみ赤し

柏 内田郁代

ことさらに野太き声を寒鴉

鳩の声淋しく沼面転がり来

堆肥小屋脇の臘梅香の強し

鏡開煤の香の餅ぜんざいに

荒行の柝の音澄めり寒青空

柏 古川京子

古日記終の一行有難う

農小屋の屋根の雀に御慶かな

うす紅の百合根の芯の淑気かな

松明けをしめやかに待ち友の葬

輪島塗の大きな座卓鏡割

流山 沢辺たけし

○海坂の雲切り開く初日かな

蒼天を吹かるるやうに雪螢

山茶花垣風となりたる馬の影

ゲルニカの牛の眼をして雪女

嫁が君ほこり落とさず走る梁

流山 穂苅照子

枯葦の強く撓ひて鳥放つ

上りたる脚立の軋み年暮るる

○冬かもめ翻るたび白深め

流木は海見るベンチ日向ぼこ

あらたまの父と子繋ぐ凧の糸

浦安 田中幹也

合戦のありし山野や大根引

荒鋤の田にいつぱいの初日かな

大利根の大きな曲り福寿草

佗助や傾く門に朝日浴び
○方丈記手擦れて棚に寒の月

東京 谷田部

栄

茅葺の屋根美しき初日の出
笹鳴の氏神様に初詣
蕾もつ青菜を包丁始かな
雪嶺のふもとの家に春着の子
返論に転ずるマスク外しけり
○雪や山形悦子さんを懐むこんこん山形悦子さん逝けり

東京 須賀允子

激変の我を慰む晦日月
破魔矢さげ手を繋ぎゆく老二人
○青々忌父の面影慕はしく
薄氷に閉ぢ込められしピオトープ
紅山茶花散りもやらずに凍てゐたり

東京 名和政代

立縞のもんぺ膨よか南蛮絵
漱石の猫塚の路地冬董
○ジーンズのポケットに鍵年新た
初詣賽銭箱のなき末社

買初の将門煎餅もてあます

東京 山本絢子

○白寿まであと三年やお元日
痛めたる腰を撫でつつ初参
万両の赤実の清しレストラン
人氣なき山のホテルや暖炉燃ゆ
山小屋へ出入り自在の小鳥くる

東京 藤田裕子

裏白のはや反り返る夕べかな
余りたる薬捨つるも年用意
日めくりの柱に重く年あらた
箆袋に赤ん坊の名もお正月
赤子受く綿入れの前寛げて

東京 赤松郁代

寒蓬出刃庖丁を畦に挿し
○樹から樹へ移る天辺枝打師
寄り添ひて深夜の星の凍つるなり
溪水を引く炭焼小屋の外厨
磨かれし炭焼小屋の小佛壇
こむらさき炭焼窯に煙立つ

東京 島野ひさ

初夢は何も見なくてそれで良し
新しき歩道橋より初日の出
書き込みの予定なきまま初暦
冬鳥の梢から梢へ今日の晴
石神井川底まで澄みて鴨遊ぶ

東京 佐藤晴子

冬晴れの岬に干さる魚籠と傘
青空に一つ残れる榎櫃の実
いつもの道今日は輝く初日の出
○富士塚や草其々に初日影
煌々と落着き払ふ冬満月

東京 加賀葉子

夜廻は中止と赤字回覧版
初暦三枚引ききてお元日
鱈ちりの身のほろほろや雨静か
目薬や天井の点は冬の蠅
木蓮の枯葉色増す寒の雨

東京 久留島規子

数へ日や富士山の笠雲見晴るかす

数へ日の雨を欲しがる大地かな

富山から鮭の紅濃き蕪鮓

○富士山赫く染め大歳の入日かな

丹沢をしたがへ富士山の初御空

東京 下嶽孝一

青空の雲寄せつけぬ寒さかな
百日の重石に寝かす大根かな
蔦口の支ふ法被の梯子乗
盆栽の老松に跳ぬ初雀
をさな吹く七草粥に野の香り

東京 杉浦一子

朝の声ふくら雀の一騒
墨薫る干支の賀状の一筆画
冬菊のしばし花やぐ日の力
春を待つ十七文字に季語を入れ
くれなゐの終の色秘め冬薔薇

東京 草間三香子

歪なる柚子の膨らむ仕舞風呂
上京の儘ならぬ子の布団干し
○着水の音雨のごと鴨の群

參道に耳搔を売る七日かな
卒寿なる主治医と御慶交はしけり

東京 岡村純子

黄落のなか道化師の目が笑ふ
どんぐりの音する磴をのぼりけり
商店街ポインセチアの華やかに
紅山茶花一輪残し刈り込まれ
雀らの嗚かしまし月冴ゆる

調布 大林彬彦

大川に押し入る波や今朝の冬
吊橋をひしと引き合ひ山眠る
朝日子のふくらむ庭や福寿草
花ほのと茎太ぶとと福寿草
日照のゆたかに青む冬菜畑

武蔵野 砂地宏子

白々と焔の形枯銀杏
荒庭の煌めき一つ水仙花
真つすぐに寒の日差しが頬を刺す
大寒の空へ鴉のワンと鳴く
ヒヤシンス硝子器の中根の真白

立川 疋田華子

道祖神実生南天赤と白
十二月波形乱るる心電図
入院の準備整ふ年の暮
臘梅や何時も今頃入院す
○退院や喜び色の冬すみれ

町田 吉中愛子

茎抱き三角錐の霜柱
冬あたたか塞の神てふ棧俵
瞬きの一粒近し枯木星
打ち合うて菊炭鈴の音したる
七日かな翡翠の糞真珠玉

町田 広瀬俊雄

畦径や足裏くすぐる霜の音
ブロッコリー茎の芯まで凍てにけり
侘助のふんはり落つる鉢の中
年酒酌むグラスは青き江戸切子
蠟梅の香り届けり昼の月

町田 桔梗純

冬日背に硝子拭く吾母似なる

お飾を米屋持て来る年の暮
四家族画面に揃ふ御慶かな
初買は漫画雑誌と海苔おせん
風すさぶひと日となりぬなづな粥

日野 喜多尾 明子

雑木山落葉深ぶか日に睦み
廃校の壁さんさんと冬落暉
参道を駆け来る春着あねいもと
○籠り居の秒針ゆつくり餅に黴
室の花一日三度のストレッツ

横浜 榎 本文 代

短日や手を振つて消す仏の灯
○真中に小さき礼者の靴揃ふ
包丁に鉄の匂ひの寒さかな
日暮まで風の荒れたる松納め
手鏡に残る指跡雪もよひ

横浜 西 本 才 子

日溜りの葉に影を置く冬の蠅
風垣や鼠くはへし猫くぐる
鐘楼の裾に寄せあり落葉籠

海光や割干大根すだれ干し
ト口箱に冬菜育てて染物屋

横浜 川 越 昭 子

椿の実落ちて来さうな夕日かな
富士に雪なき日のお墓参りかな
コロナ禍や北は雪降る日の続き
御年玉孫にもらひし齡かな
命綱つりて木を切る年の暮

横浜 大 橋 雅 子

孫堂々雑煮お代り三杯目
鏡開厨に小豆煮る匂
透明になりゆく葛湯母偲ぶ
コロナ禍や通信投句の初句会
臘梅の林ほのかに薫りけり

横浜 山 崎 郁 子

数へ日の越より届く蕪鮓
大壺に千両投げ入れお正月
駅伝の禪手渡す雪の富士
青春の生涯の友初電話
女神像を寝かしある墓地草青む

横浜 田 賀 煤 惠

先づ夫の忌日を記す初曆
一輪の水仙匂ふ和室かな
青空へメタセコイアの冬木の芽
寒鯉の動かぬことも力なり
○閉店の貼り紙濡るる夕時雨

川崎 山口 千代子

幼な子の疲れ知らずや初笑
日を受けて凍蝶ぽつとはばたきぬ
エコバッグふくらむ家路寒の雨
頬叩く両手冷たき大鏡
竹の秀の揺れの激しき寒の朝
川崎 新妻 奎子

大き葉を一枚拾ひ掃納
露店の名地面に貼りて年用意
松飾り見慣れし門の鮮しき
糠漬の胡瓜俎始かな
冬桜児童のゐない小学校
川崎 大久保 進

蜜柑剥くドラマらよよ決め台詞

○数へ日の儘よままよと無精髭

年の瀬の背な打つ風の尖りゐて
くゆり立つ大師の香炉初御空
あらたまの妻と二人の雑煮かな

鎌倉 恒川 清爾

寒星や風の洗ひし大空に
読初や角のめくれし歎異抄
初日の出父は頭を垂れゐたる
初夢に富士を見むとて早寝して
初旅は父の棄てたる郷の宿

横須賀 織田 みさゑ

生命線友と見比ぶ初句会
寒夕焼真つたゞ中の遠嶺富士
停年のなき主婦の座や女正月
○生くるとは楽しき事よ冬のばら
日差背に瑞穂の国の鋏始

伊勢原 佐藤 和子

棕櫚の葉のざんばら髪の寒さかな
冬草や崖這ひ上がる波頭
雑煮食ぶ八十路七十路差向ひ

松過ぎのこゆるぎの浜たもとほる
寒晴や朝の大山赤らみて

秦野 佐藤 嘉洋

落葉山鮮やかなる葉手に家路
赤城山裾長くして枯野かな
年越の夜空かうかう月の影
実生なる庭の万両挿し祝ふ
天気凶に密の縦縞寒に入る

松本 中條 今日子

蛇もみれば鯨も泳ぐ秋の空
客を待つ月の一字の軸をかけ
残雪の乗鞍岳や鞍の形
春空を突きさすがごと槍ヶ岳
鳥帰る空に大波小波かな

富士 神田 美穂子

着ぶくれて幸先詣の絵馬掛くる
長き夜の厨さまさま電子音
遥拝の富士の大きく初社
四日はや大口開くる齒科の椅子
冬眠の蛇へ地のこゑ草のこゑ

静岡 大村 峰子

冬舁つくづく犬語の辞書欲しき
大つごもり夫の介護に暮れにけり
救急車の人となりたる四日かな
恵方なる湖芯に水輪広ごりぬ
点滴の紐に括られ去年今年

静岡 海野 みち子

輪飾りす先づ一番に金山社
初観音餅と干柿高坏に
年玉を五つ拵へ子ら待てり
七日粥供ふ遺影に話しかけ
蹲の苔の彩褪せ寒に入る

静岡 宮崎 知恵美

二本づつ干しある大根夕日浴ぶ
霜月や靴紐にある結び癖
宇宙ステーション肉眼で見る冬の夜
何も無きことも良きことかぶら汁
湖に気嵐の立つ朝かな

静岡 長島 操

滴水の湖の煌めき十三夜

ツーリング山震はせて文化の日
鹿の跡取入れ近き大豆畑
後の月眠れる村を照しけり
白く光る屋根の並びぬ今朝の冬

静岡 岩崎 武士

葱白く洗ひ上げたる日和かな
初空を峽の山々押し上ぐる
○初鷄に村百軒の目覚めけり
読初や欣一の句を声にして
万象誌書架へ整理の春隣

静岡 曾根 満

飾綯ふ藁の匂ひに噎びもし
○紙漉の舟に大波小波かな
火を埋め火箸を差して一日終ゆ
里神楽湖の水照りへ刀振る
大寒波宝永火口雲を吐く

静岡 藤原 千代子

母のものの羽織る心地や冬日差
大晦日爪外づされてシヨベルカー
藻のなびく川筋に住み初旭

雑煮膳芋も大根も畑より
○歟始鷄の声山羊の声

静岡 荻野 加壽子

ナプキンの白冬薔薇の真赤かな
聞き覚えありや霜夜の靴の音
抱き上ぐる赤子の重さポインセチア
寒卵仏は何も口にせず
親指に絆創膏や寒波急

静岡 小川 明美

獺解禁おまはりさんは朝礼中
農小屋の動かぬ時計初氷
憂国忌胡床の脚の刀傷
ゲルニカの馬の鼻息冬ともし
オランウータン檻に毛布の干されをり

静岡 藤本 節子

しぐるるやたれの照りよき焼団子
水底に芥を沈め山眠る
加湿器や母の静かな息遣ひ
小寒の富士の全容あをあと
○七日粥芹も薺も登呂田より

静岡 大長文昭

年木割るにはとり小屋へ木端飛ぶ
正月の風義経の睥睨す
元日の月へ地球の照り返し
正月や犬の風太も膳につく
冬の川大きく曲がる西の木戸

静岡 加山ひさ子

食卓に金縁の皿クリスマス
手水鉢に水浴ぶ鳥や梅三分
掛け合うて優しき言葉冬すみれ
夜の更けてひとりの酒やごまめ囃む

○花柄のスカーフを解き御慶かな

静岡 吉野美智子

合流の渦に落葉のをどりをり
虹色に草を離るる霜雪
一筋の流れをのこし川涸るる
冬すみれ仄温かき夫の墓
○ゆらゆらと海燃え上がる初日かな

静岡 石川裕子

文机に湯のみのわ染一葉忌

何編まん母の遺せし毛糸玉
初買や眼病平癒の絵らふそく
寒暁や救急車内に長き刻
実万両梳きやる吾子の髪ゆたか

静岡 望月敏男

熊出ると札の新らし冬菜畑
石室の中の中まで冬日射す
前山に狺銃音の訝かな
年用意奥の院へと禰宜走る
冴ゆる夜や発射台めく工場群

富山 若島久清

白鳥の助走に鴨の慌てをり
潜る時鴨の短き足たたむ
置き炬燵ずるずるる腕角力
ドライバー雪に寝そべりチェーン巻く
買初の小鳥の餌の粟穂かな

射水 成瀬真紀子

乾杯の深紅のワイン猩猩木
アマビエの金太郎飴年惜しむ
赤べこのうなづき返す御慶かな

子ら帰り部屋広々と寒の入
左義長や竹爆ぜ山河引き締まる

金沢 岸川素粒子

みの虫のみの脱ぎ捨つる流離かな
冬めくや風の一言木の一語
○寒雷や七竅^{ききょう}皺に埋もれて

子に遅る老のなげきやもがり笛
木枯しや糊口をしのぐ芸の音

金沢 田村愛子

医王晴鈴生りの柚子色増せり
山に雪萱屋根修理結の衆
○牡蠣粗朶へ一湾の汐満ち来たる
一人居の軒に十本大根干す
屋根雪を下ろす声とぶ下山佛

金沢 井村和子

丹頂の下り来る空のいぶし銀
小夜時雨古き手帖に恋の歌
初雪をほのといただき骨納め
白障子点るに夫の声有らず
事ひとつ娘に論さるる初電話

真つ先に朝日射す藪笹子鳴く
狐啼く夜なりあまねく星の数
土を這ひ土を離るるどんどの火
冬至風呂まだ生なまし手術痕
先代のすり癖のこる初硯

金沢 今越みち子

玄関に赤きペコ置く年用意
ぺこんぺこん鴨ら頭の雪落す
寒施行林の中へけもの道
雪の道狸通りて幅広げ
寒施行丑三つ時に狐現れ

金沢 伊川玉子

笹子鳴く朝の牛乳温めをり
白鳥のくぐもる声や日矢射せり
白峰の風のかたちの氷柱かな
讚美歌を手話にて歌ふ雪の夜
焦げくせの鍋底みがく春の昼

金沢 伊藤美音子

お天道様背負ひ蓮根掘り上ぐる

冬至粥湯気もろともに吸りたる
北風を来し少年の眉太し
野ざらしの舟の竜骨冬ざるる
三日はや部屋散らかして探しもの

金沢 高田 たみ子

コロナ禍の終息ねがふ初詣
師の墓に積もれる雪のベレー帽
揺るぎなき狼煙の松や淑氣満つ
中吉の神籤手にして御慶かな
寒禽や罅の入りたる登り窯

金沢 豊田 高子

○父の名を嗣ぎて一打の鍛冶始
年酒酌む下戸も上戸も威儀正し
搾乳のバケツ湯気濃き寒四郎
泥分けて泥を掴みて蓮根掘
軍馬碑へぼんと跳び乗る寒雀
師の墓に先客のあり初雀
奥つ城や冬鳥供華をせつせつと
鼓門いで雪吊の松青し

金沢 松井 佐枝子

城塞の高み取り合ひ寒鳥
めらめらと溶け出す田雪霰となり

金沢 石川 純子

深閑と街の戸固く冬めけり
たちまちに大粒あられ庭囃す
おもしろき子の節回しかるた読む
○火搔き棒に怒る炎のどんど焼
田の神の能登の冬空遠くあり

金沢 河野 尚子

鱈汁や怒涛となりし日本海
袋より米粒撒きて寒施行
避雷針高き古刹や鯨起し
雪解けて畝のあらはに千枚田
雪吊の影を散らして鳥の水脈

内藤 塩井 志津

初電話声変りせし少年と
籠り居の有り合せなる七日粥
天然の初物を得て獅大根
零れ種よりの万両実のゆたか
冬枯の中きはやかに松の色

七尾 谷 渡 末 枝

靄晴れて白鳥の湖鴨の川
瑞雲てふ茶杓の銘や初茶湯
月よりも星の明るし寒の入り
どか雪や森羅万象音の無く
初日記看護実習克明に

敦賀 石田野武男

急流へ腹をどらせてあられがこ
髪踊るあやつり獅子や初芝居
○九尺の風垣つづく海女の村
寒鰯を双手に提げて越の漁夫
火打石火の神へ打つ鍛冶始

敦賀 倉谷紫龍

凍蝶や坐禅の石を動かさる
佗助や去来の庵の仄あかり
比叡風湖畔の草木大揺れに
玉霰松にはねたる尼御前
鰯起し一閃刺さる若狭湾

敦賀 倉谷ます美

白鳥の「かうかう」と鳴く湖の荒れ

着ぶくれて外湯めぐりの手形札
燻製の煙吐く小屋雪催
三方の木の肌を拭く年用意
風吹きて竹瓮転がる近江宿

敦賀 靄田勝子

「ご自由に」とあり籠に盛る十夜柿
崩れたる土塀のすき間冬の蜂
ふぐ刺しや波の渦見ゆ珠洲の皿
孔子座す古き学府や冬の梅
理髪師の手もとへ光る雪起し

大阪 入山繁幸

雪晴れや連なる尾根は国境
裾分けの柚子ぜいたくに冬至風呂
永劫の時を区切りて除夜の鐘
健やかな母は白寿の大旦
一羽鳴き一羽応ふる初鴉

徳島 福島吉美

青竹の丑の干支吊る松飾り
切り分けて酒粕こぼす蕪餅
法螺吹きのお提げ来る鴨一羽

マスク縫ふアニメの柄の布裁ちて
政治家の嘘の上塗り寒波来る

徳島 村上 和義

大楠の注連引く祠淑氣満つ
合戦の屋島の岩場牡蠣を打つ
検温をするもされるも着膨れて
深海の軍艦朽ちて海鼠突く
松過ぎてロバのパン屋の声響く

徳島 宮西 修一

枯蔓の吹かれてゐたる鉄条網
教会の上にオリオン投函す
初鳩の一塊となり大空へ
掠れたる表札の文字松納
食堂の鯖煮をつつく女正月

徳島 平岡 功

湯豆腐や和む宴に飛ぶ訛
霜焼や眼裏浮かぶ母の顔
園長の三角帽子クリスマス
鉛筆を削り揃へて年暮るる
花街跡来て綿虫の乱舞中

室戸 安岡 みさき

海に出て凧白兎波となる
セーターに毛玉育ててこもりけり
大西風の前ぶれなるや磯の波
俎を洗ひつつ聞く除夜の鐘
大珊瑚採りし話題や初句会

高知 仙頭 宗峰

冷えし手を詫びつつ妻の肌着替ふ
凍雲の包み余せし日の眩し
冬ざれや風の岬の仏たち
妻病みて用事山積み年の暮
元朝や老々介護暇のなし
○仏壇の母に御慶の膝正す

長崎 丸本 祥夫

北窓に厚紙貼られ無人駅
老松の鱗の反りや寒の晴
蓑虫の蓑に付きたる霧氷かな
虎河豚のええかええかと袋糶
冬桜波止場に近き茂吉歌碑

那 前田 貴美子

杯あげてマスクの内に言祝げり
海光へ甘蔗の花穂を切り落す
器量よき蕪抱かれて値切らるる
鬼餅や庭に積足す竈石
冬麗や壁の喪服のうすほこり

那 大 湾 宗 弘

越冬の蝶連なれり雨意の杜
新聞が吹きとんで行く初御空
吐く息の海へ吹きとぶ寒稽古
寒禽の声のうるみや里日和
月桃の香を持ち来たる初鬼餅

※初鬼餅は子の生まれた家が配る鬼餅のこと

那 比 嘉 半 升

去年今年母の部屋より鳩時計
二日目のおでん旨しと独り酒
寒鴉塩田跡に影落とす
鬼餅寒水桶朽つる地割畑
○寒昴遺影の父のボルサリーノ

那 當 間 シズ

マスクして目と目の会話疫病の世
看護師の眼一途やマスクして
しのためや微光まとへる甘蔗の穂
着ぶくれてうするばかり記憶力
初声はひよどり庭の小枝蹴り

那 中 本 清

牛合せきのふに甘蔗を刈り終へて
横綱牛と勢子一列に甘蔗穂道
且柑もぐ海のきららを手に包み
アルコール手指に慣れて鬼餅寒
○中身汁手に旧正のふくらしや

那 謝 花 寛 営

説教に老いの兆や冬薔薇
説教を終へて困めり冬至粥
初景色牧師ひとりの影を引き
百年の古酒を舐めたる二日かな
礼拝の椅子のまばらや朝霞

宜野湾 吳 屋 菜 々

異人墓地の鉄扉開く音冬ざるる

十字架の小さき墓碑銘冬の鳥
○四温かな寢墓に延ぶる榕樹の根
音立てて外人墓地を時雨過ぐ
榕樹の実腐す神父の寢墓かな

西原 宮 城 勉

咳鎮め第四楽章タクト立つ
○年明くや闇より湧きし久高島
大海の至純の大気初旭
日すぢ伸べ初日はこぶよ久高島
人日の大口あけて齒科の椅子

謹告

山本みゆき氏（同人・敦賀）は、入院加療中のごころ、昨年亡くなられた夫君、山本麓潮氏のあとを追うように、令和三年二月十六日に逝去されました。

享年八十四。

謹んでご冥福を祈ります。

万象俳句会

俳句カレンダー掲載句自註

俳人協会発行の今年の「俳句カレンダー」には、万象から五名の方の句が掲載されています。掲載月の万象誌で作者の自註を順次ご紹介いたします。

子雀の地鳴き日比谷の音楽堂

神田美穂子

日比谷公園には何回か足を運んでいるが、行く度に句材があり、東京駅から近く、地方から行く者には格好の吟行地である。

昼食はいつも松本楼と決めているが、初冬の銀杏の降りしきる中のガーデンウエディングに、また夏には支配人と思しき人が傍らの花壇でデザートに添えるブルーベリーを摘んでいるのに出会った。一方、日比谷花壇では店長（男性）が落葉を掃いていた。心字池では池に船を浮かべ松手入れをしているのにも出会った。

ある時音楽堂を覗くと人影はなく、雀の子が鳴きながら弾んでいた。コンサートや催事がある時には華やかな音楽堂もシーンと静まり返っていて、雀の地鳴きが心地よかった。

雑学鳥獣植物戯詩

全24回

八木幹夫

第3回 【罌粟粒の永劫】

十五年ほど前、ある出版社から仏典の日本語翻訳を依頼された。親しみやすい現代語訳にしてほしいという。高校時代から般若心経は耳にも口にもなじんでいたが、本格的に訳すとなると至難の技だ。仏教学者中村元氏の辞書を取り寄せ、サンスクリット、パーリ語の意味を探り、般若心経の試訳をした。すると版元の反応が良い。続けて阿弥陀経、観音経等を訳し、くだんの一冊『仏典詩抄 日本語で読むお経』となった。

キリスト教の「永遠」という概念が以前から捉えにくいと考えていたが、仏教の「永遠、永劫」の捉え方は具体的かつ即物的だ。那由多（サンスクリット語）は漢語では無限、無量の意。永劫の「劫」もインドの時間的単位の最も長いもの。この時間の喩が面白い。極小の罌粟粒の大きさを想像してみてもほしい。四十里の立方体（鉄城てつじょう）というに詰まったその一粒一粒を百年置きに取り除き、そのすべてを尽くしてもなお、終わらない気の遠くなる時間。それが劫だという。「百千万劫」の時間をくぐるとは一体どういことなのだ。その目撃者はいるのか。嗚呼！永劫の時間よ。

公益団法人俳人協会

毎月25日発売
定価1000円(税込)

俳句界

2021年4月号

特集

俳句評論つて難しい？

- 総論「俳句における評論 大輪靖宏
- 影響を受けた評論紹介
- 井上弘美 青木亮人 岸本尚毅
- 長嶺千晶 村上頼彦 高柳克弘
- なぜ、評論を「書く」のか
- 坂口昌弘 角谷昌子

特別作品30句

池田澄子

クラビエ 俳句界NOW 刘馬康子

地貌季語の魅力

◎ 地貌季語の魅力 宮坂静生

- | | | | |
|-----|------|----|-------|
| 北海道 | 北見弟花 | 秋田 | 萩原都美子 |
| 茨城 | 今瀬剛一 | 愛知 | 加古宗也 |
| 石川 | 中川雅雪 | 滋賀 | 田島和生 |
| 鳥取 | 白岩敏秀 | 徳島 | 谷中隆子 |
| 長崎 | 深野敦子 | 沖縄 | 岸本マチ子 |

*セレクトション結社「ひまわり」西池冬扇

私の一冊 佐藤文香「翻車魚」

対談

佐高信の甘口で「コンニチハ！」
柚月裕子（小説家）

別冊 投稿俳句界 一流選者14名！
日本一充実の投句欄

※一部変更の可能性があります。



株式会社 文学の森

お求めは... ●〒169-0075 東京都新宿区高田馬場2-1-2 島ビル8F
TEL.03-5292-9188 URL <http://www.bungak.com>

同人作品の佳句

内海良太

輪標踏み出す一步大股に 小松敏郎

今冬の北陸、東北の日本海側は何年かぶりの豪雪に見舞われた。小松さんの秋田も風雪がひどかったらしく、久しぶりに標を履く羽目になったようだ。あの標の輪つぱのことを思うと、踏み出しの一步の大股は容易に想像がつく。

若菜摘畦に自転車寝かせ置く 澤 照枝

澤さんは霞ヶ浦に近い土浦にお住まい。周囲は都会の騒音から免れた環境にある。正月の若菜摘みは土地の風習や生活に直結していて自然体。自転車の扱い方の素朴さが状景とマッチしている。

舟廊下を湖風わたる淑気かな 田中道江

琵琶湖の北方に浮かぶ竹生島。島の宝蔵寺観音堂に秀吉の御座船の部材で建てられたという「舟廊下」がある。

ことに正月の竹生島には淑気を感じるが、湖風のわたる舟廊下は新春の瑞祥の気がみちている。

青々忌父の一面影慕はしく 須賀允子

松瀬青々（1869～1937・1・9）は細見綾子の俳句初学時代の師として知られている。須賀さんの父上も大阪の青々門で、昭和の初め頃「倦鳥」で俳句を学んでいた。

たまたま松瀬青々の忌日に古い俳句雑誌を開いて、父の面影を浮かべているのである。

着水の音雨のごと鴨の群 草間三香子

鴨の群れがしぶきを上げながら次々と着水する。見ていて飽きない光景だが、視覚を聴覚に転じたのが面白い。雨の音はザーザーとかジャージャーとか。続けざまに着水して、ザーザーに実感がある。

初鶏に村百軒の目覚めけり 岩崎武士

近所の鶏の声を聞かなくなつて久しい。せめて正月ぐらいはうつらうつらの中で聞きたいものだ。こぢんまりした村のあちこちの家から鶏の音が上がる、いい夜明けの雰囲気だ。

寒雷や七竅ななくは皺しわに埋もれて 岸川素粒子

この句から芭蕉の「笈の小文」の書き出しを思いだした。「百骸九竅の中に物有 かりに名付けて風羅坊といふ」。

「竅」は身体にある穴。耳、眼、鼻、口、人間の肉体と思えばいい。「物有」の物は詩精神。岸川さんは「風」時代からの大先輩。詩精神はいたつて健在。我々後輩をいつも指導して頂き感謝している。お元気のもととは北陸の強烈な寒雷からエネルギーを授かっているからだと思う。

火掻き棒に怒る炎のどんど焼 石川純子

どんど焼を仕切る人は忙しい。長い火掻き棒で安全を確認しながらどんど焼の燃え加減をコントロールする。火勢が弱まれば火掻き棒で空気を送り込む。すると再び音を立てて燃え上がる。まるでどんどを「怒らせた」ように。

コロナ禍で電子メールを活用

北海道支部新年俳句会

コロナ感染症の拡大が続く中、新年句会の開催は難しいと判断。しかし、令和二年の句会がごとく中止となり、句会活動ができない状況が続いていたため、感染対策を取りながらの句会のあり方を同時に模索しました。投句・選句だけの形に留まることなく、選評を共有できる少しでも「座」に近づける句会ができないか、新年句会を試行の場として開催。

①リアルタイムで投句、選句ができないか。
②選評を参加者で共有できないか。

③記録等の作成を効率的にできないか。

④「万象」十五日の締め切りまでに結果を返信する。

右記の課題を解決できる電子メールを活用。北浦詩子さんが、投句、選句、記録の様式を作成。札幌句会勉強会に参加している二十人に配信。

十二月二十五日までに一人三句投句、全投句者の一覧を作成。十二月二十六日にその一覧を配信。一人五句選、選評記載。一月四日までに瀨谷和代まで返信。

一月五日に選句結果（選評含む）を電子メール等で配信、句会終了。

電子メール等での試みは、大成功。何よりも日程どおりに対応できたことは電子媒体活用の最大のメリット。今年もコ

ロナ禍での句会が想定されますが、新年句会の試行は、句会のあり方を前進させるものとなったと実感。しかし、早く「座」の文芸を楽しめる日が来ることを祈るばかりです。（瀨谷和代）

松原智津子特選

宇宙の砂置きてはやぶさ凍て空へ 田邊正代
時事的ではあるがまさに人々の感動を誘った出来事で後世に語り継がれるべく一句残しておきたい気持ち。ダイナミックの一言に尽きる。

岡本 敬子選

光浴ぶ銀杏落葉にある色香 小島良夫
日が当たると落葉の中でも銀杏がひときわ輝いて終のはなやぎを見せる。朽ちるものの美しさ。消滅するのではない自然の永遠性。

佐藤 哲選

日を恋うて枯野の点となるわたし 岡本敬子
今年北海道の冬はきびしいとの予報。あかぎれの手をさすつて身がまえる。見渡す冬野は枯野が広がる。思い切つて一本立ち。太陽は遠くにかすみ自分の無力だけを痛感する。そんな毎日。

高得点句

雲燃やし海より出づる初日かな 松原智津子
さんざめき一樹を揺らす初雀 太田佳美
今朝の冬大蠟燭の火の震へ 林 陽子
閉館の別れのワルツ日の短か 藤原善明

白玉の春

新潟県支部新年句会

新年は雪となりました。暮から松の取れる頃までひたすら降り続けました。新潟の新年句会は悪疫の影響もあり、紙上句会となりました。二十六年前の阪神淡路大震災。あの年も大雪でした。燃え盛る炎へ大きな雪玉で鎮めたいと思いました。投句百二十一。投句者数十五名。内海主宰、小林副主宰、江見編集長より頂いた評に新潟の同人の評を添えました。(高橋ひろ)

内海良太主宰特選

われの名をしかと聴きたる初祓 高野松風
初詣。ながしかのお賽銭で本殿にてお祓いを受けることが出来る。長い祝詞の最後の方で、祓いを受けた人の名が次々と読み上げられる中に、自分の名前もしかと読み上げられて目出度い。名前を読み上げられる迄の緊張感が伝わる。

小林愛子副主宰特選

雪起し巻機山にはじまれり 森山眺湖
季語の「雪起し」は雪雷とも言いこれが一つ轟くと、あゝ又冬がやって来たと、覚悟とも安堵ともつかぬ心構えが出来るのである。巻機山は機織りの神としても信仰されている。ここに「雪起し」があつたのは象徴的である。

江見悦子編集長特選

誰となく会釋して去る大焚火 佐藤雄二
今は見かけることが少なくなつたが、焚火の回りにはいつ

も人の輪があつた。見知らぬ人が立ち寄り手をかざす。そのうち一人二人と抜けてゆき、緩やかな出会いを共有した後のほのぼのとした温もりに「会釋して」が慎ましく美しい。

森山 眺湖特選

果てしなき空は灰色冬来たる 榊原キヨ子
海を控えた県都新潟を含めた平野のどちらを向いても灰色で重苦しい冬空が覆いかむさつているのである。何の修飾もなく只単純に「空は灰色冬来たる」の表現に深みがある。

佐藤 雄二特選

初詣 仁王へ飛ばす紙礫 森山眺湖
仁王尊は仏法を守る神、金剛力士である。その仁王様へ念願かけて紙礫を飛ばし思う所に命中すれば願いが叶うと言う。全身紙礫まみれの仁王様。新年らしく明るい一句。

高橋 ひろ特選

犬小屋よりひよいと狐や深山宿 継田ひでこ
一見狐のような犬？ 飼犬に育てられた狐？ 人と馴染んで己が狐であることを忘れた狐？それでも狐は生まれた山野は忘れはずまい。想像が拡がつてゆく。狐にも幸あれ。

高 点 句

誰となく会釋して去る大焚火 佐藤雄二
生家なき故里に買ふ鮭一尾 佐藤雄二
銭湯の湯気の中より御慶かな 佐藤シズエ
包紙きちんと畳む一葉忌 渡辺志ま
初詣 仁王へ飛ばす紙礫 森山眺湖

苦手を克服

静岡「季節風」新年俳句大会

令和三年の「季節風」新年大会は、新型コロナウイルスの流行の影響により、紙面上の俳句大会となった。

十一月に、自由題の三句、初の試みとして「和」の字を入れた題詠の一句を含めて四句を募った。六十一名、二百四十四句の投句があり、選句も全員で行った。

富士山の写真を表紙にした作品集は、同人十六名の特選句評も載せて、二十七ページの充実した作品集となった。



「しろう。」と呼び掛けている。

神田美穂子特選

夕日透く皮となりたる木守柿

吉野美智子

大村 峰子特選

獣らの足跡均す鋏始 小林美成子

曽根 満特選

狝解禁おまはりさんは朝礼中 小川明美

藤原千代子・荻野加壽子・望月敏男特選

瓶の中の戦艦大和十二月 小林美成子

海野みち子特選

冬耕の土の温みに和みけり 岩崎武士

宮崎知恵美特選

初 凧の命一文字大空へ 柴田 芳雄

長島 操特選

百歳の母に集まる冬座敷 池田和子

小川 明美特選

久女の忌狐日和となりにけり 荻野加壽子

藤本節子・吉野美智子特選

老次に逆らふ気骨冬来たる 宮本瓢六

大長 文昭特選

初茜和蘭陀坂を染めにけり 内藤允昭

加山ひさ子特選

煮凝りや目玉飛び出す鯛のあら 神田美穂子

岩崎 武士特選

火の匂ひ水の匂ひの鍛冶始 小林美成子

石川 裕子特選

ひいふうみころころ回し柚子湯せり 望月 南

継続を力に

金沢「あかね句会」新年俳句大会

令和三年一月七日（木）あかね句会の新年俳句大会を予定しておりました。コロナ禍でもあり、会場のソーシャルディスタンス、マスク着用は厳守することとし、当日の選句が速やかに運ぶよう井村和子支部長始め、みなで創意工夫をし、投句は事前に係まで送り、作品集を準備しておりました。

しかし、大会当日の天気予報では寒波襲来で大雪とあり、出かけることも危ぶまれ、やむなく中止といたしました。後日選ということで作品集を全員に郵送いたしました。

コロナ禍のこの一年を振り返りますと、句会も吟行も自粛となり、今まで何の疑いもなく出来たことが出来なくなり、緊張感の中にも俳句



に寄り添って来ました。これからも継続の力を絶やすことなく希望を繋ぎたいと思います。

写真は、雪吊りを施した兼六園の銘木唐崎の松です。凜とした美しい冬景色に励まされています。
(石川純子)

丹頂の下り来る空のいぶし銀
小春日の廊下に弾む手織機
蓬菜に荒磯の小石飾りたり
左義長や竹爆ぜ山河引き締まる
猪の毛皮も並べ地物売る
水引の髭の光りて飾海老
笹子鳴く朝の牛乳吹きこぼれ
野ざらしの舟の竜骨冬ざるる
寒禽や罅の入りたる登り窯
年酒酌む下戸も上戸も威儀正し
隠沼へ山茶花紅を惜しみなく
大根の駆け出しさうな二本足
庭の闇着込んで探す寒昂
帳尻のあはぬ家計簿年の暮
新年の一輪活けて兄の墓
パン作りの仕上げに塩や福寿草
寒林へ足跡残すうさぎかな
元旦の朝日が撥ねて食卓に
幾度も望む白山淑気満つ
消灯の廊下に咳のこぼれゆく

井村和子
谷渡末枝
中條睦子
成瀬真紀子
塩井志津
今越みち子
伊川玉子
伊藤美音子
高田たみ子
豊田高子
松井佐枝子
石川純子
河野尚子
白村喜久代
道場啓子
宮崎恵美
谷内瑞枝
高木艶子
鶴尾正江
松田好子

風 花 横川良子

冬ぬくし女人高野に乳房絵馬
 寒林の奥に聞こゆる禅問答
 寒椿鎮守に小さきすべり台
 犬ふぐり辻に合祀の道祖神
 城址てふ標残りし冬菜畑
 雪催ひ問確と武家屋敷
 まんさくや陶工の住む隠れ里
 風花やかつての牛舎がらんど
 樋橋佐原や音立て落つる寒の水
 枯蘆に舟を隠して漁仕舞



吟行のままならぬ今、地元の印旛沼を目指し成田道を歩いた。成田詣りで賑わう街道も、現在は人の往来も少ない。

判読し難い道標を逸れて公園となった白井城址、千葉氏の守護神白井妙見社、白井氏創建の八幡社、天満宮、冬菜畑近く大田図書館の墓、空濠など歴史を感じる場所を巡る。地元の信仰の拠点である古刹も多い。

印旛沼は遊歩道も整備され、鳥声を楽しみながら防人の歌碑まで、改めて足元の吟行を再確認。

石神井城址

下嶽孝一

武蔵野の城址に乙女風光る
土塁あと雀弥生の日に遊ぶ
城跡の石碑を翔てり揚雲雀
空堀に老松そびゆ春の風
青空の三宝寺池花こぶし
つはものの伝説の池春の鮒
金の鞍見ゆるてふ松春日影
照姫の入水の悲話や薄霞
白椿まはり明るき姫の塚
殿塚を出で姫塚へ蝶の昼



東京練馬の石神井公園に室町時代の城址がある。南と東を石神井川が流れ北側に三宝寺池がある。この地に栄華を極めた室町時代の城主豊島泰経が敵軍に攻められ、落城の際に白馬に黄金の鞍を置いて三宝寺池の底に沈んだと言われ、その娘照姫も後を追って入水したと伝わる。空堀の老松に登れば池の底の黄金の鞍が見えるという伝説がある。練馬区では昭和六十三年より「照姫祭り」を開催。毎年照姫役を公募し百人の行列が石神井を練り歩く。

新同人競詠

讃州路

大阪 入山 繁幸

一三六八の石段半ば榎櫃の実
登りつぐ磴や象頭山装へる
癒さるる町の足湯に落葉浮く
スニーカーとリュック姿の秋遍野
蔀上げ紅葉明かりを御仏に
水城の濠に茅渟鯛秋の潮
枳形を抜けて日溜り菊花展

寒夕焼

佐野 売野

緑

実南天地にとどくほど垂れけり

芋莖和へ白磁の小鉢選びけり
冬至南瓜押して叩きて切りにけり

校庭の隅にリヤカー冬休み
聖夜なる陶のトトロの傘さして

鴨の群次々羽搏く水しぶき
藍色の岩に溶け込む冬の蝶

冬より春へ

調布 大林 彬彦

菜を洗ふ背中に雪の気はひかな
花つぼむやうに白鳥着水す
冬ざれやハングル文字の難破船

特攻を軍神とよぶ寒さかな
実弾の土裂く裾野冬の鵞

土踏めばはづむ力や春の土手

津浪あと絶滅危惧種芽吹きたる

小鳥来る 東京 岡村純子

川風に満月揺るる神田川
雨のごと木の葉降り来る夕べかな
時雨るるや御堂の闇に立仏
艶やかに坊の芒の暮れ残る
弁天を抜けて小春の葉草園
銀杏散る人なき園の夕まぐれ
黄落の礎に異国のギター弾き

霜の夜 東京 草間三香子

お捻りの筈飛び越すや猿回し
久闊の友若わかし初電話

人氣なき染工房の鳥総松

青あをと広まりゆくや初御空

葉牡丹の渦の打たるる夜半の雨

最終便の高速バスや雪催

鉄鍋の鯽の煮凝り母遠し

寝正月 那覇 謝花寛営

初日待つ厚き雲間の久高島

説教を終へて困めり冬至粥

お年酒に酔ひて風受け礼拝後

基地隣り基地へなだれて甘蔗を刈る

諍ひををさめ牧師の寝正月

お降りの殉教墓へ走りけり

鬼餅の島に冷え込み襲来す

除夜詣 武蔵野 砂地宏子

あんよして転んであんよ厚着の子
厨より甘辛匂ふ大晦日
伸し餅を切りたる父の力瘤
大晦日宵に急げる美容院
夜更かしのトランプ遊び大晦日
風邪の子の耳澄ましをり襖越し
年玉や年々深き母の皴

沼氷る 札幌 中鉢弘一

渥原へ翼ふはりと鶴降りる
冬日さす牧場の牛の目は潤み
森の音も香りも閉ぢて沼氷る

沼凍る芯に僅かの水面かな
冬ざれや陸の老船錆こぼす
岸に揚がる流水帰る海の無き
日だまりの色をあつめて福寿草

冬の花 徳島 平岡

功

合唱の響く教会菊日和
高の瀬峡漣痕照らす冬紅葉
奥祖谷の山紅く燃ゆ冬紅葉
花八手祖父の民話の膨らみぬ
城山の黙解きたる寒椿
群青の大河と語る野水仙
車椅子花柵の香の下へ

芳賀の四季 大村かし子

芳賀の風景が心を籠めて詠まれていた。固有名詞に頼らない句があると作品に広がりが出たように思う。

笠雲をかむる筑波山や春田打

田打は、田植に備えて田を打ち返すこと。苗が育ちやすくなる。筑波山を遠くに農作業の光景が広がる。筑波山が笠雲を「かむる」と擬人化した表現は、なかなか雲を脱ぎたがらないようにも見え、のどかな春の季節感を出している。

今年竹日本遺産の庄司窯

人間国宝の浜田庄司が開いた窯が益子に残っている。大切に保存されているのだと思うが、「日本遺産」では物が見えてこない。皮を脱ぎながら青々と伸びた若竹は、益子焼を工芸品へと高めた庄司にふさわしい。

芳賀大地輝くばかり豊の秋

黄金色に色づいた穂をたわわに垂れた稲田。豊かな出来秋の景は心も豊かにしてくれる。「輝くばかり」を句の中心に置いた三段切れは気になるものの、稔りを育んでくれた大地を慈しんでいる作者の誇らしい気持ち伝わってくる。

那珂川の空の明るし蕎麦の花

那須岳を源とする那珂川。豊かな川の流れは、四季折々の風景を楽しませてくれる。高く澄んだ青い空と、畑一面に広がる白い蕎麦の花の対比が爽やかである。

三保の秋 藤本節子

羽衣伝説の残る三保の松原を訪ねた一日。清水港へも足を運び、誠実な写生で過ぎゆく秋を詠んでいる。

秋惜しむ天女の松へ薦の笛

三保の松原で、作者は過ぎゆく秋を惜しんでいる。浜辺へ寄せる波の音、松原を吹く風の音、そして薦の声の響きも、作者の心に深く沁み込んだことだろう。「天女の松へ」は「天女の松に」としたら句意が明快になると思う。

民宿の前を濡らして翳干す

水揚げされたばかりの鰯を丸干しにしているようだ。庶民的な魚に、気取りのない民宿のあたたかいいもてなしが見えてくる。コロナ禍で旅に出られない昨今は寂しい。

遠洋船秋夕焼を戻りくる

髭面の帰還の漁夫やうろこ雲
鰹や鮪など遠洋での漁は数カ月に及ぶことも。漁期が明けた船が還ってくる清水港での作と思う。一句目、「秋夕焼」で余情のある句に。出漁の時はなやぎとは違って一抹の寂しさも。二句目、細やかに美しく沖へ広がるうろこ雲。船を降りた髭面の漁夫の心の安らぎが感じられる。

港湾の穀物サイロ秋燕

港の空を大きく翻る燕は、そろそろ南に帰る時を迎えている。「港湾の穀物サイロ」と物を写生して、「秋燕」の季語が作者のしみじみとした心情を伝える。

去年今年銀河鉄道乗車中

大晦日、作者は宮沢賢治の『銀河鉄道の夜』を読んでいる。既に何度も読んでゐるのに又読んでゐる。愛読書なのだ。「乗車中」は、賢治の世界に浸っている証。

本の主人公ジョバンニは孤独で空想好きな少年。カムパネルラは同級生の親友。二人は「銀河鉄道」に乗って旅をする。作者も同じ汽車に乗り二人の近くに席を取る。

句集『暮色』や「万象」を見ても分るが、作者は星や月、夜や空が好きなロマンチスト。「空の奥」の句集も持つ。又、亡き両親や弟、恩師や愛犬を句に偲ぶ優しいセンチメンタリスト。逝く年を惜しむ感傷の中、遠くへ行つてしまった彼等の事を思う内この本に手が行つたのだ。

賢治が『銀河鉄道の夜』を書いたのは、最愛の妹トシの死がきっかけと云う。一説にカムパネルラはトシがモデルとも。ジョバンニは賢治。作者は、彼等の近くに座り車窓をゆく神秘的な景色を眺めながら、二人の会話や二人と乗客との話に耳を傾け、この本の主題である死や死後の世界のこと……本当の幸せとは……など考えている。

年が明けて本は読み終えたが、今回も余韻が残る。気持的にはやはり途中下車。幻想的で暗示的なこの本の魅力に惹かれ、いつか又この汽車に戻って来るに違いない。終点は銀河の彼方、空の奥。

(三屋英俊)

山茶花を咲かす力がまた散らす

俳句を始めた頃に、椿、芍薬などの花の散り方について学んだ。椿は花びらからは散らない。ムードのままに俳句をつくることはご法度であり、自然現象に嘘があつてはならない。俳句の基本である写生がいかに大切であるかを実感してきた。掲句は、平成30年4月号「万象」に掲載された自選句である。

山茶花はツバキ科ではあるが、花びらから散る。そのため、「散る」や「また」でリフレインのような連続性を感じさせるが、「散る」に主眼を置き、その瞬間を写生した句であると鑑賞させていただいた。助詞の「が」が新しい情報を導く役割を果たし、「散る」に焦点があたつていく。さらに、「力」は山茶花と対比する言葉としては強く固い印象を受けるが、山茶花の「命」の表現とすれば、納得がいく。他の言葉は見つからない。花は咲いて散る。

命の継続にはエネルギー（力）が必要である。そこにはおのずと命の連続性が見えてくる。「椿」ではこの句は成り立たないかもしれない。この句は、細見綾子先生の作風に通じるものがあると感じた。

数年前、酸素吸入の機器とともに来道された飛高先生の姿が思い出され、先生の人生とも重なる句なのではと思う。先生のご冥福を心より祈りたい。

(瀨谷和代)

旅人の我も水浴び仏誕会 せいぎ

句集『台湾抄』所収。この句集は第一句集『台湾優遊』以降、16年間の台湾の人たちとの出会いから生まれた210句を纏めたものという。仏誕会は日本では仏生会、灌仏会、花祭等とも言い、新暦4月8日（地方によっては5月8日）に釈迦の降誕を祝って、各寺院で行われる仏事で晩春の季語。境内にいろいろな花で飾った花御堂を作り、右手は天を、左手は地を指す小さな釈迦誕生仏を安置して、参詣人に甘茶を濯がせる（産湯の意）。山本健吉によれば、昔は陰暦で夏の季題で芭蕉以下古句は、夏の句として味わうべきという。

さて、掲句であるが、「我も水浴び」に引っかけ、理解に苦しんだ。作者によれば、台湾ではこの行事は陰暦の4月8日に行われ、ビルマ（ミャンマー）やタイからの移住者の多い或る町では、参詣人に水を掛けて祝うことで、作者はその参詣人の列に加わり水を浴びたのだという。これは釈迦の誕生を祝福して龍が天から清らかな水、甘露を灌いだという故事に倣い、仏徒は皆清浄な水を浴びて身を清め、喜びを分かち合うのであろう。ならば句意明瞭である。台湾を第二の古里という作者の台湾の人たちへのオマージュを表す句の一つと言える。

（柳澤宗正）

師を送る時雨雲より青き空 恵子

句集『冬芽』の最後に置かれた句。初出は平成14年2月の「風」誌、前年11月5日に亡くなられた沢木欣一先生を悼む句である。「風」誌は、次の3月号「沢木欣一追悼特集号」で終刊となるが、その中の「看病記」（原田しづえ記）を読むと、作者は入院中の沢木先生に付き添う一人として、三か月にわたって懸命な看病を続けていたことが分かる。ご逝去の時も作者はその場に居合わせていた。

掲句の「時雨雲」とは「晩秋から初冬にかけて降ったりやんだりを繰り返す時雨をもたらす雲」^⑫とある。今にも時雨となりそうな降りみ降らずみの空からは、時に日が差したりもする。

敬愛する師を亡くした悲しみと虚脱感から見上げた空には灰色の時雨雲。しかし作者は、その合間に青空を目の当たりにした。不安定で混沌とした景を見定めたのは、悲哀の先に明るさを求めようとする無意識の姿勢だったのではないか。

眼前の景と実感を何よりも大切にした作者に訪れた、新たなスタートの句と思いたい。「風」の後継誌として「万象」が創刊されたのは14年4月である。

⑫ 「風と雲のことば辞典」より （江見悦子）

同人作品評（二月号）

林 陽子

母を連れ神有月へ発ちにけり 阿久津勝利

陰曆十月のことを、八百万の神々が出雲大社に集まり、日本中の神が留守になる事から「神無月」という。一方、神々は皆、出雲へ旅をする為、出雲の国は「神有月」となる。

お母様と御一緒に出雲へいらつしやつたのですね。孝行なさいましたね。作者の年齢から拝察すると、お母様は恐らく百歳に近いのでは？ 作者の母上への情感が素直に伝わってくる。中七に据えた「神有月へ」が、絶妙な働きをしており、更に、切字「けり」が余白を生み、しみじみとした余情のある句となった。

馬頭琴聴くや櫓の棚田席 上岡佳子

平明な表現であるが、切字の効果により想像力がかき立てられる句。「馬頭琴」は、モンゴルの弦楽器で胡弓の一種。稲刈りを終えた棚田の階段を利用して、その馬頭琴の演奏会が開かれたのだ。今この時期、野外音楽会は三密回避には最適又、その場所は一面に籬穂が出ている棚田、最高のロケーションだ。櫓の香の中、馬頭琴の澄んだ音色が聞こえて来そう

である。

九十九髪梳く爽やかや朝の窓 島田和枝

「九十九髪」のつくもとは、つくもも（次百）の約で百に満たず九十九の意。それを「百」の字に一画足りない「白」の字とし、年配の女性の白髪にたとえた。

作者の毎朝の日課、洗顔をし、丁寧に髪を櫛でとかしている。朝日が差し込む窓からの心地好い秋の風。読み手までも清しく、気分爽快にさせてくれる。何気ない日常の一齣が切り取られ、凛とした作者の生活の様子、充実感をも窺うことが出来る。季語「爽やか」が生きている句。

両の掌に貫ふ無花果日の重み 売野 緑

「無花果」は、柘榴や葡萄とならび最も古い果樹の一つで唐柿とも。この句の眼目は「日の重み」である。撓に実り、日を存分に受け熟した「無花果」は、ずっしり重く、とても甘く美味しかったのでは。

「両の掌に貫ふ」が具体的に、受け取った時の作者の満面の笑顔までも見えてくる。「無花果」の説明は一切なく、繊細な感覚で「無花果」を捉え、平明に表現した句。

風呂吹の箸に崩るる旅の果 大木 茂

同時掲載の句より、京都から小浜までの若狭街道（鯖街道）を旅した様子が窺える。この句は、旅の最終日の食事風景を平明に表現している。

「風呂吹」は大根や蕪を軟らかく茹で、熱熱を吹きながら柚子味噌、練味噌をかけて食べる料理。

季語「風呂吹」と「旅の果」の意外性が効果を上げ、無事旅が終った安堵感、旅を振り返り感慨にふける作者の心中をも読みとる事が出来る、奥の深い句。

痩せし棧 勞りながら障子貼る 奥 太雅

「障子」は冬の季語だが、「障子洗ふ」「障子貼る」は秋の季語となる。「障子洗ふ」は、障子を庭先に出し、水をかけ束子で「ごしごし洗うのだが、毎年のことなので障子の骨が歪になつたり、細くなつたりしていく、それを「痩せし棧」と実感をうまく表現した。

そのあと新しい障子紙を丁寧に貼るのだ。この句の眼目「勞りながら」である。近年、障子のある家が少なくなり季節性が薄くなっているが、作者御自身の正月を迎える準備の一つなのだろう。共感を覚えた一句である。

雪吊の匂ひ 広ごる夕の鐘 吉中愛子

調べが良く、豊かな詩情を感じる、しみじみとした味わいに富んでいる句である。「匂ひ広ごる」とあるので、兼六園のような大きな公園の雪吊を想像した。

注目したのは、「雪吊の匂ひ」である。雪吊の木の匂い？雪吊の縄の匂い？ それとも雪そのものの匂いだつたのかも。又、真っ白な雪の公園で視覚を、雪吊の匂いで嗅覚を、鐘の音で聴覚を刺激してくれ、想像がふくらむ。

厨窓影より先に鵯の声 荻野加壽子

鵯は晩秋に、縄張り確保のためキーンキーンと鋭い声で鳴く。それを「鵯の高鳴き」という。

お勝手仕事をしていると、賑やかな鵯の鳴き声は聞こえてくるが、姿は一向に見えない。この句の眼目である「影より先に」は、実に言い得ている。日常生活の小さな発見を生き生きと臨場感のある句に仕上げた。

立冬の水なめらかに刃物研ぐ 豊田高子

立冬の水で刃物を研いだ、と言う暮しの一齣を詠んだ平明な表現の句。注目は「水なめらかに」である。作者の意図する「水なめらかに」とは？ 淀まず、すらすらと通り、摩擦力が働かない、など深読みを試してみた。

季語「立冬」が効果的に働き、水の透明感、手に触れた冷たい水の感覚等、読み手の五感をより一層刺激してくれる。

羊蹄山大きく残し牧閉す 入山繁幸

道産子自慢の羊蹄山は、円錐形の火山で富士山と似ている為、蝦夷富士ともいわれる。山麓には、牧場や、アスパラガス、ジャガイモなどの畑が広がり見事な景である。

秋が終わる頃、畑仕舞いをし、牧を閉ざすが、羊蹄山は変わらずそこにあり、見守つていてくれる。この句の眼目「大きく残し」である。北海道の大自然に身を置き、五感を研ぎ澄まし大景を捉えた抒情の一句。

冬 晴

飯塚キミ (栃木)



新幹線と馬場を隔つる冬の霧
貌を出す厩舎の馬の息白し
冬晴を跳ぶ馬バーを軽やかに
馬衣の萌黄色なり年の暮
後ろ脚の蹄を洗ふ冬帽子
日の薄き陸に群がる鴨まろし
ことごとく岸辺の鴨は沼へ向き
水平に着水したる番鴨

豊後の旅

坂本具子 (横浜)



吊し雛白秋生家の奥座敷
柳川の青鷺遊ぶどんこ舟
滝落つる神話の里の宮の杜
国東の山なだらかに秋日和
朝霧の晴れて煌めく金鱗湖
紅葉散る壁画薄れし樞御堂
瀬の音やもみぢ葉拾ふ湯の宿り
暮早し礎の崩れし富貴寺

万象招待席評（二月号〜三月号）

谷 渡 末 枝

八月 尽 入山 繁 幸

三密を避け店先でかき氷

読経もマスク越しなり終戦忌

世界に広がる「新型コロナウイルス」。日本でも感染症患者が確認されて以降、誰も予想だにしなかった事態が、年が明けても日々更新されて、社会に大きな不安を与えている。

流行語大賞にも選ばれた「三密」、その回避は新しい生活様式の中で、一人ひとりが身を以て実践すべきことであり、マスク着用も、場所や職業を問わず、今では常識だ。

因みに「アベノマスク」をしている人を見たことがない。

支へられ祈る老婦の原爆忌

日本の八月は祈りの月だ。いつかテレビで、黒衣の女性の黙禱の姿に、わけもなく感動した経験がある。

命のある限りは、人の手を借りてでも、慰霊碑に深い祈りを捧げる姿は唯々神々しい。

冬 桜 岡村 純子

日常を静かに捉えている句は、全体にそつがない。

作者に、「上手につくろうと思わずに正直に、言葉を

大切に」と教えた飛高隆夫先生。その飛高先生は、令和二年十月十六日に逝去、誰もが驚きを以て悲しんだ。

まみゆるも物言はぬ師や秋時雨

忘れまじ師の声笑顔冬桜

未だ受け入れ難い心情であっても、今後折に触れて思い出すであろう、あの時の師のあの笑顔、あの声を。

俳句を続けていく作者に、それは大きな糧になるのでは。

秩父路へ 売野 緑

以前もこのコーナーで「秩父」を詠んだ作品があった。

細見綾子は「大都会を一步出ると、こんなにも美しい自然が息吹いている。以前に見た吉野の桜もよかったが、今年見た秩父の桜は見事であった。」と述べている。

「秩父」は、関東圏に棲む俳人のメッカかもしれない。

紅葉晴機関車ピーと石灰山へ

秩父路の大きき夕日や薬喰

作品からは、平凡な日常から抜け出して、久々に行楽気分を味わった満足感が見て取れる。惜しいかな、それ故に句の出来映えがやや甘くなってしまう。何の感動もなしに説明しては、折角の季語の存在も曖昧になってしまう。

これまでの気取らない句は作者の魅力。今後も注目する。

「秩父路」の自然や風土を肌で感じた句を見つけた。

秩父路や仏も萩も風の中 小菅高雪

越後平野 佐藤幸示

炎天を来て本堂に三尺寝
掲句は、「炎、天、本、三」にある「ん」のリズムが心地よく、スルリと喉元を通り過ぎたが、「炎天」と「三尺寝」の季重ねが胸にチクリと引つかかった。

「万象招待席」の作品は、題名をつけての八句。

力が入りすぎて、視野が狭くなったりして、普段の柔軟さがどこかに消えてしまうこともある。作ったままにしないで咀嚼し、また一歩も二歩も下がって見直すと、新たな問題点が見つかったり、意外な発想が閃く場合もある。

弥彦嶺を映す大河の水澄める

「越後平野」の題名に添ったスケールの大きな句。

先の号に〈日本海に注ぐ大河の水澄める〉が載っていた。
インパクトのあるフレーズは、大事にしたい。

春が来た 内田節子

春めきて田に水音の戻りけり

季節の訪れを、色々な角度から捉えて詠む。そこに俳句の魅力、楽しさがある。

この句の「水音の戻りけり」には「春」を掬い取った作者の軽い驚きが、臨場感をもって表されている。

ふつくらと着てセーターの濃紫

「ふつくら」は実感。「濃紫」に高級感が漂っている。

「春めきて」から「年の市」までを跣足で詠んだ作品には使
い古された言葉がやや目立ち、題名が「春が来た」であるなら
ば、春季で纏めた作品でもよかった。

越の旅 古谷悠紀子

丁寧な詠んだ句からは、旅の満足感が伝わってきます。

日本海トンネルぬくるたび紅葉

全山の紅葉を目にしたときの感動は、言葉では言い尽くせない。又、暗いトンネルを抜ける度に、目に飛び込んでくる紅葉の鮮やかさには、息衝く間もなく感嘆の連続だ。

鉄塔のつづく刈田や柏崎

三十数キロにおよぶ柏崎海岸。刈羽村に跨って、東京電力
柏崎刈羽原発が七基、集中している。

夥しい「鉄塔」は「柏崎」の代名詞。地名の効いた吟行句
に仕上がっている。

家苞の越の寒梅神の留守

「上五、中七」は、感動のない説明になりました。

貴重な銘酒を土産として持ち帰ったのに、「留守」という言葉
葉が入る季語では、どこか離れすぎていませんか。

万象ノオト



テーマ「鏡」

私のカガミ

静岡 長谷川秀子

息子は幼稚園の頃からサッカーが大好きで、小学校から大学までサッカー漬けの毎日でした。志の高いチームメイト、指導者の方々に巡り合う事ができ、一緒にプレーさせて頂くことができ、一緒に喜びや悔しさ苦しさなどをしました。

そんな中、私がいつも心に留めていたのはドロシー・ロー・ノルトさんの「子は親の鏡」の言葉です。そして、どんな状況であつても笑顔でプラス思考でいようということ。それが息子にも伝わる。そんなことを思いながら毎日過ごしていたなあーと。

息子も社会人一年生。始めてのことばかりで大変そうですが、毎日笑顔で

がんばっています。そんな息子の笑顔で私も笑顔。いくつになつても…。

「私のカガミ」それは「息子」です。

鏡の中の他人

札幌 島崎 洋

最近あまり落ち着いて鏡を見た事がない。身だしなみも気にしない方だし、ナルシズムに浸る趣味もない。「40過ぎたら自分の顔に責任を持って」と言うが、「ほつといて!」と言いたい。でもきつと女性とは違うのだろう。いくつになつても鏡の前にいつまでも座っている。

亡き母が高齢になつてから白内障の手術を受けた後、鏡に映る自分の顔を見てしばらく落ち込んでいた記憶がある。きつと細かい皺がよく見えたのだろう。視力の回復も考え物である。

私も鏡の中の自分が別人に見えることがある。例えば泥酔状態で覗く飲み屋のトイレの鏡…そこで一句

忘年会鏡の中にいるゾンビ

今年はコロナ禍で、ゾンビには会え

なかった。

或る物語

津 瀬野喜代子

遠い昔になつた時代のことである。当時、国民学校の三年生だつた私の国語の教科書の内容は「古事記」がお伽噺ふうにかかれたもの、平安時代の源家の武将や日露戦争で戦つた兵士の話が多かつた。中には文語体もあつたが声張り上げて読んでいた。その中に一篇、今も思い出す物語がある。

銅鏡は古代の遺跡から発見され、表には美しい彫りをほどこし裏側は磨いて鏡とした。或る所に貧しい母娘が住んでいた。ささやかで静かな月日が流れて行き、老いた母は亡くなった。独りになつて涙にくれる娘は、母親が「淋しい時には開けて」と言い残した箱の蓋を取り「あ、お母さん」と呟き微笑した。

メッセージの受け取り方はいろいろだが、私はこの慈しみの物語が好きである。

鏡 と 私

東京 馬場美智子

私は約五十年前に、結婚式をあげました。

結婚生活を始めるための道具として、家具一式と三面鏡を持つてきました。

三面鏡は、全身が写る大きいものを選びました。

結婚した当時は、鏡の前で化粧をしたり、着物の着付けをしてもらったり、洋服の仮縫いをしました。

現在は、わざわざ三面鏡にむかって化粧をすることもなくなりました。

洗面台の鏡で化粧をしたり、手鏡で簡単に化粧をすませています。

三面鏡は、着替えをする時にだけ見る生活になっています。

練習場の大鏡

横浜 小坂橋泰山

三十歳台から四十歳台の約二十年間はゴルフに熱中し、月に一回は、ゴルフ場に行つてプレーした。

三十年前に、近所に新しいゴルフ練習場が出来たので、よく通つた。一番端の打席の横に大きな鏡が設置してあった。スウエイやヘッドアップせずに

体幹を保つてスイングすることが課題であつた。実際に打つ前に、鏡を見ながら、ゆつくりとシャドー・スイング

して、ヘッドアップしていないか確認、この練習の繰返しで効果が出て、スコア

も向上、コンペでの好成績につながつた。私は七年前に背骨の外科手術を行

つてゴルフは止めざるを得なかつた。練習場の方もオーナーが死亡、相続税

支払いなどのため売却。今は跡地に二十戸程の分譲住宅が建つている。

近くを最近散歩した際にあの鏡を思い出した。

手 鏡

千葉 柳澤道子

娘が家に泊りに来た朝、リビングのテーブルで二人して化粧を始めた。

私の化粧が終わると、娘は私の卓上鏡を使おうと、自分の小さな手鏡を化

粧ポーチに仕舞おうとして、「これ小学生の時友達に貰つたものよ」と言う。直径6センチ程の小さな手鏡、簡素な木枠に可愛い絵が、それも剥げかけており取手は欠けている。

勿論私が見るのは初めてで、娘の説明を受けて改めて目を遣つた。四十代の娘が小学生の頃貰つたとしたら、三

十年は経つている。「へー凄いね」と言うのと、ここまで使つていると捨てられないと言う。私も納得して領いた。

何でも簡単に手に入る時代だからこそ、年月を経て来た物にかえつて愛着

がわくのかかもしれない。そう言えば私も、古い小さな手鏡を化粧ポーチに忍

ばせている。

「万象ノオト」投稿募集

▽8月号 「ざる」(4月末日締切)

▽9月号 「犬」(5月末日締切)

▽長さ 本文 17字×19行以内

〒194-0041 東京都町田市玉川学園

3-10-19 桔梗 純

俳書探訪

古川京子

「銀漢」2021年1月号(創刊10周年記念号)

平成二十三年一月、伊藤伊那男が東京で創刊。

会員のための俳誌、全員参加の俳誌作りで、明るく楽しく

「いのちのうた」を詠む、を理念とする。

猪垣 伊藤伊那男 八句より

自然薯掘埋蔵金の山に入る

聞香のごと椋の花に凭る

猪垣を囲むか囲まれてゐしか

令和二年優秀作品集 3、4、5頁を一面に仕立て、牛五頭を素描した誌面、彗星集巻頭・星雲集巻頭の二十四句がパランスよく配置されている。

彗星集 長き夜も甲意紛らすには足らず 堀切克洋
より 干大根富士にまはせる注連のごと 大溝妙子

一枚に畳む命や蝶凍てて 清水佳壽美

保証書も付くぼろ市の掛時計 小山蓮子

箱眼鏡負けん気の日々噛み跡に 多田美記

燕帰る日の衰へを知ることく 堀内清瀬

星雲集 のどけしや飴の兎は棒に飛ぶ 辻本理恵
より 給油完了副住職の盆支度 今村昌史

第十回「銀漢賞」、第四回「星雲賞」が発表されている。

第十回「銀漢賞」二編・各二十句より

明易や曲家伝ふ馬の息 保田貴子

一頭に千の鈴の音祭馬

六孔に春を吹き込む机笛 大野田井蛙

地の声を聴くかに傾く机衆

第四回「星雲賞」一編・十五句より

飲食の母を励ます朝の蟬 西田鏡子

普陀落を目指しをりしか星飛べり

文章では、新年号特別寄稿として「近江蕪村・九老さんの酒と俳句」を鈴木琢磨氏、「もの・ことの哲学④」を堀切克洋氏、「芝不器男の山河①」を長井哲氏、「日本のこころ70」を武田禪次氏が健筆を揮っている。特に「あなたなる夜雨の葛のあなたかな」を代表作とする芝不器男と同県人の長井氏は、不器男の故郷を彼の目線で歩き、これから一年をかけ、不器男の短い生涯(26年余)を追い、遺作を鑑賞し、不器男の心に分け入りたい、と興をさかす。

令和三年綺羅星集新同人紹介で、主宰は、新同人の心得の最後を「いのちのうた」を詠み、「燃える結社」を継続するために各々の立場で、出来ることを考えて、ご尽力いただくことを期待します。」と結んでいる。

黄金の豪華な表紙に相応しく、各頁がきらきらしていて主宰の思いが誌面に充分浸透している「銀漢」1月号である。

(筆者住所 〒277-0083 柏市日立台二一四一二)

佐藤幸示（新潟） 巻頭作家（三月号）プロフィール



佐藤幸示さんは、令和3年3月号で次の四句により、巻頭に輝いた。

行く秋の弥彦山角田山と藍深し
神苑に菊の香りの押し合へる
塀の上対の通草の口開く
玄関の礎を這ひゆく秋の蜂
いづれも写真に徹した素直な写生の
眼と医療従事者らしい緻密な目を感じ
られる。令和3年1月号でも準巻頭に
選ばれている。

佐藤幸示さんは、昭和18年有数な豪
雪地帯である、新潟県魚沼市に生まれ、
新潟大学卒業後、内科医として、地域
医療に力を尽くしてきましたが、昭和
43年新潟大学医学部に入局。その後、
県立がんセンター、県立小出病院等の

要職を歴任。平成20年4月県立小出病
院の名誉院長を最後に現役を引退。現
在は、県労働衛生医学協会に所属して
おります。

幸示さんの俳句との出会いは、退職
後に趣味のひとつも欲しいと考えてい
た頃、新聞紙上で、俳句入門講座があ
ることを知り、俳句については多少興
味がある程度の関わりであったが、取
り敢えず受講。講師の「風」同人、近
藤彩江さんの懇切丁寧な講座に感銘を
受け、後日、彩江さんの「風河交俳句
会」を見学、即日入会した。

入会後は、初めての句作に四苦八苦
し、伸び悩んだ時期もあったが、句会
の楽しさと、地道な研鑽の末、着実に
作句力が向上し、令和に入ると、毎月
安定した成績を残し三句選に定着。
令和2年5月号で四句入選。

百歳の母の言葉で年始め
家々の黄金色なる初日影
お降りの後にほんのり虹二重

大罅の走り渡れる鏡餅
令和2年12月号でも四句入選。

水を打ち月命日の僧を待つ
甚平の父そはそはと孫を待つ
秋虹を背に老犬と老夫婦
海岸の家族を包む大夕焼
「万象作品」の佳句にも多くの句がある。
少雪に魚沼の人落着かず 2年6月
日本海に注ぐ大河の水澄める 3年1月
など。

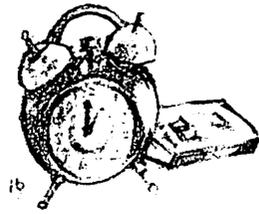
幸示さんの趣味は、クラシック音楽
を聴くことで、市民オーケストラにも
参加。朗々たる歌唱力は聴く人を魅了
する。幸示さんの明るく温厚な人柄は、
多くの会員に慕われ、ここ数年、幹事
として会の運営を一手に引き受け、「和
の句会」を目指して活動している。

幸示さんは、以前より手薄な同人会
を支えてきたので、これからも、新潟
県支部の中心となつての活躍を期待し
ている。幸示さん、おめでとうござい
ます。

（佐藤雄二）

万象作品

小林愛子選



煤払ふ檀徒揃ひの被り布 敦賀 中川雅月
雪催ひ東尋坊を波攻むる
冬菜摘む急勾配の岬畑
紙漉の簀桁あやつる白樺
芳しきけぶり渦巻くをけらの火 札幌 北浦詩子
干支巡る御朱印始め初詣
ポタージュのとりみ濃いめに寒に入る
産毛剃る頬の乾きや冬深し
石路咲けり遠山に濃き雲の影 横浜 小坂橋泰山
遠阿夫利水車に冬日差して来し
わだなかへ沈みゆく日や寒椿
友見舞ひ釣瓶落しの煉瓦道
冬ざるる松の根方に猫の餌 静岡 本多ひとみ
波除けに波の碎けり三島の忌
凍空や薄紫の富士の肌
蒲団干す三保松原の青空に
亡妻植ゑし榎植十年たわわなる 新潟 佐藤幸示
野良猫の胸にすり寄る冬隣
一輪の寒椿活け茶席とす
露天風呂木枯の湯気巻き上げる

読初や大き活字の芭蕉本新潟高野松風

お降りの雪すきとほる轍かな

喜寿なればうす味もよしのつべ汁

日向ぼこ糸細めつつ針のめど

境内に人氣なき年初詣東京鶴田智美

真夜中の一人咳して見る時計

早四日湯屋の煙や空青き

初富士の便り裾野の姉者より

氏神に詣でしのちの初湯かな福岡宮田千恵子

節料理母の昆布巻いまいちど

泥つきの大根つつむ新聞紙

寒晴やぴりぱり飛びて静電気

冬構菓の香にほふ武家屋敷佐倉鈴木隆久

不揃ひの声張る子らの夜番かな

湯をそそぐ花麩が開く冬の朝

あれこれと悩むも愉し日記買ふ

冬の蝶キャベツ畑の日溜りに大和中谷由郁

焚火して焔に踊る小枝かな

小さき手を包みて愛し初茜

ポマードの微かに匂ふ冬隣

茶毘に付し聖樹の灯る道帰る栃木飯塚キミ

折りたたみの杖持ち歩く枯野かな

夕富士のうすうす青き冬田道

蹲踞の水ひたひたと柗咲く

粉米雪ひたむきに降る大旦札幌佐々木茂

三日はや輓馬重賞レースかな

人日や主治医言へらく肉食らへと

底冷えや冬季閉鎖の能舞台島崎洋

蔦越しに冬日の洩るる喫茶室

電飾と競ひて浮かぶ冬満月

梟の住処としたる楡の洞園田鶴子

除雪車の雪を咬む音よもすがら

時計台の鐘のなる街去年今年高山哲英

大水柱のすつぽんぼんを叩き割る

若水を嘔みて力や荒行す

深雪野の闇かきまぜて獸跳ね竹重富子

公園の散歩かんじきたづさへて

北の町ことさら白く冬満月

避難場所の広場は雪にうづもるる

降り頻る雪にも無垢の匂ひあり田邊政代

蜜滴り輪切りで食みぬ冬林檎

大木の伐られ冬空放たるる

初夢に奥の細道訪ねけり札幌藤原善明

達筆の母の便箋年新た

富士山を背負ひ快走駅伝かな

ななかまど白い世界に朱を放つ
八代洋子

点滴の音なき音や雪明り

雪しまき先行人の点となり

さんざめき一樹を揺らす初雀江別太田佳美

初孫の喃語高らか初笑ひ

初日の出太平洋に金の道
新潟 齋藤 信

納豆の糸引く箸に日脚伸ぶ

赤ん坊の瞬き止まる冬の雷

園児らはしりとり始む雪催

日に四五回玄関前の雪除ける
齋藤ヨシ

玄関前除雪一筋一人道

除雪車の置きゆく雪にてこずりし
榊原キヨ子

雪しまき舫ふ漁船の片寄りて

大寒の波を蹴散らし巨船出づ
いつの日か転びし道や雪しまき

除夜の鐘とだえては鳴る吹雪かな新潟佐藤シズエ

雪しまき鳶は宙にたたらふむ

悴んで雑魚計りるる蟹の妻
島津治子

我が干支の切手の絵柄年賀状

施設入り決めたる友や雪の朝

初市の静まる中を通りけり
中塚滋子

雲海の朱鷺色冬の夕夕焼

雪降るや無限の空の鉛色

寒灯や堂の御佛村を守る

菰蓆なども忘れず年用意燕渡辺志ま

新雪へシャベルの刃先深く入れ

飼犬の野性に帰る深雪晴

声もるゝ厨の辺り冬囲ひ新庄曾野部礼子

落葉搔く暮れ色纏ふ熊手かな

若水や井戸の蛇口の水豊か
新しき礎百段の初詣方賀稲川清子

丑年の子のいただける注連飾

持ちかへる親も手伝ふ注連作

黒豆のことこ煮ゆる除夜の鐘
塙 テル

寝そびれてコップ一杯寒の水

葉牡丹を濡らして去りぬ今朝の雨

初御空筋肉の張る丑の像芳賀福武幸子

書初の墨のにじめる児の大書

天空に雪の男体山曝しけり

暁の八溝嶺煌めく初景色貞岡上野恭子

塗椀に雑煮をよそる今朝の膳

初雪へ両手を上げて掴む子等

冬晴や妣の名ありし地蔵の碑鹿沼渡辺利子

祖母からの続く味付け御節かな

初詣我ひとりなる村社かな
佐野飯塚満里子

枯落葉一群となり横切りぬ

山茶花の散りて華やぐ峡の道

浮島の枯葦越しに遠筑波山
金子恵子

受け入れを待つ救急車冴ゆる星

花形に塞ぐ障子の穴二つ

煤払十年前の日記出づ
木村君子

妖怪のカレンダー掛け年用意

親と子のそれぞれの吉初みくじ

退職の知らせ賀状に添へてあり
黒川しげ子

鳥の声寒の空気を切るやうに
修理せし黒きパンプス春を待つ

水細る川原に冬の鷺の群佐野齋藤ミチ子

凍晴れや庭に雀の来て跳ねる

玄関に立ちて初日を拝みけり

着ぶくれて庭の掃除や星ひとつ
関口かつ子

分別の袋揃へて師走かな

舞ふやうに枯葉落ちゆく峠かな

尻を振りまつすぐ沼へ鴨の群
店網洋子

寒菊の黄の耀ける日和かな

真青なる空や枯木の隙間より
仲山さよ子

釣り上げし寒鮒散らすしぶきかな

さるすべりの幹の黒瘤寒に入る

白鳥の羽搏くしぶき七色に
菰原美穂子

冬落暉上毛連山たたなはる

日だまりに冬のミニ薔薇移しけり

山眠るセメント工場の機械音
義本美智江

白鶴鴿凍る水面を歩きけり

マフラーして写る図書館の顔認証
年の瀬や彩雲背ナにパラグライダー

死が近し妻よ爛酒熱くせよ 古河青木正男

落鮎の腸まで苦しひとり旅

折込みの墓石が安し秋彼岸

紅きざし蕾の殖ゆる姫つばき きたま須藤初枝

ベビーカー小犬を乗せて草もみぢ

療法師フルートを吹くクリスマス

寺守る地藏に小さき松飾り 作日部安久都 登

大太鼓着ぶくれの列うごきだす

若水のコーヒーいれる朝餉かな

祝事何ひとつなき温め酒 志木森山洋之助

放課後の駄目出し続く寒稽古

万歩計の歩数見せ合ふ福詣

一斉に小枝天刺す冬至かな 和光板垣陽子

亡くなりし皆出でまほし初夢に

初雪と夫に告ぐ間に止みにけり 川越岡野輝子

鏡餅走りし罇もめでたけれ

薬味葱きざむ厨に初日受く

風の道懸大根の匂ひたり

すれ違ふバスの空つぽ山眠る 黒木敬子

石塀に沿つてひっそり寒椿

お向かひと顔合はせつつ松納

檀林の枯山水や紅葉散る 川越津金房子

どろぼう橋来て喜多院の冬紅葉

鴛鴦の水脈交差する鏡池

雪空や脳波検査の機の中へ 常見イツ子

初春や空穏やかに遠き山

初夢によちよち三步ひ孫かな

去年今年自転車並ぶ進学塾 千葉喜多恭仁子

微笑みし賀状の中の母白寿

悴みし手に熱々のマグカップ 高田みや子

対岸も吹雪いてをりぬ信濃川

面はづし湯気に見交はす寒稽古

天辺に月の残れる初景色 松浦陵保

雑踏の音皆消ゆる寒の入

漕出式こいでしき銚子漁港の淑気かな

初旅へ扉をぱつと開きけり 柳澤道子

捨てられし氷涙のごと溶くる

空仰ぐ頬に冷たき大気かな

畑静か足跡残す寒鴉 小林あけみ

駆けつこの踏みゆく土塁霜柱 酒々井

草枯れて子猫迷ひし棄て田かな
大川へ青さ映せり初御空

釣人の帰り仕度やかいつぶり

佐倉

新谷八郎

夕されば玻璃戸のくもる寒さかな

いには野に枯色きはまり日脚伸ぶ

若水の一滴砥石に磨ぎはじむ

有泉正夫

北浦の雑魚の佃煮初筑波

人參の列のしんがり遠筑波

かんかんと足場外せば初時雨

冬ぬくし庭師無言を押し通す

搗きたての餅頬張りて誕生日

おでん食ふ我が青春のビートルズ

鈴木美根子

食パンにジャムたつぷりと冬うらら

蜜柑むく幼き日々の一つづつ

赤穂塩加減よろしき白菜漬

立原千代子

かさこそと踏んで下りるや紅葉山

秋深し両手で撫づる観世音

縫初はハンカチーフのマスクから

米田敏子

初明り疊の部屋を通りぬけ

尼寺や裏木戸開ければ花八ツ手

住み旧るや朱に色づく万年青の実 習志野 清水礼子

実南天高鳴く鳥の今日も来ぬ

冬薔薇色無き庭に咲きにけり

数へ日のひと日を雨にこもりけり

船橋

内田節子

やはらかに仏間に冬日とどきけり

柚子湯して残り香まとふ夕餉かな

約束はこの辺りまで老の春

槐島 修

節料理喰うて家系の話など

一夜にて淑氣漂ふ庭の松

年賀状止める報せのまた増ゆる

山口秀吉

成人式で貰ひし辞書の今もなほ

筑波富士山二峰を拜し初日の出

背のまろき夫の髪切る冬日向

柏

鹿毛満子

枯草をまるきめて払ふ鋏の泥

枯菊のぼきぼきゆるく束ねけり

大いなる皇帝ダリア冬日浴ぶ

村田由美子

缶コーヒー手に観想の枯木立

冴ゆる夜の高階に聴くヒール音

弾初や音叉に耳を澄ましをり

松戸

石川幸子

どんど焼北へ東へ向く炎

フィレンツェを扱ひし人より初電話

一病が二病となりて去年今年松戸菊岡緋路

蓮掘りの時折腰を伸ばしをり

初稽古朝日に向ひ手を合はす

お年賀と近江の湖の魶豆

質されて春の七草唄ふごと

藁稽を啣ふるごとく池凍る

いちめんの黄落の道暮れ残る

晩秋や灯火火洩れ来し屋敷林

ゆりかもめ夕日の中を飛び交へり

打ちつくる波を眼下に石路の花市川奥澤よし江

新海苔を焙る母の背凜として

南房の潮風芯に金盞花

みちのくの日溜届く吊し柿東京石井登女

雁ゆきて海路残照赤きかな

冬籠父に本音を言ひ出せず

裸木の沙羅を仰ぎて清清し

鴝色の払暁よぎる尾長のむれ

生垣の上なきながら初すずめ

初鏡眼鏡外して覗きけり
桑原優美子

記憶より狭き校庭冬晴るる

日の当たる場所の辛夷の芽吹きかな

ビル街の骨董市や照紅葉東京小池清晴

廃屋の庭に犬小屋石路の花

丸の内バス停脇の石路の花

からからと触れ合ふ絵馬や冬の風

冬木立暗渠となりし山谷堀

靴下を二枚重ねて寒の入

冬至の湯うなじへ髪のものびすぎて

口中をころがしながら冬至粥

着ぶくれの背すぢのばしてレモンティー

数へ日や網戸を洗ふ水しぶき

年用意黒豆の香の立ち込むる

風止みて月澄み渡る大晦日

風強き玄関ドアに注連飾る

重詰の煮豆に金箔飾りたり

小豆煮るかをり庭まで小正月

マニキュアの少し派手目に初稽古

スカーフの巻き方覚ゆ冬薔薇
寒夕焼秩父連山浮き出しぬ

中澤桃子

戸川節子

田崎京子

高野翠子

小池清晴

小池清晴

高野翠子

田崎京子

戸川節子

中澤桃子

雲を染め空に広がる夕茜 東京 西村サカエ

湯上りの肌にほんのり柚子匂ふ

初明り玉砂利を踏む黙々と

繰り上げの号砲空へ三日かな

千両か万両かなと歩む徑

寒鴉睨んでゐるかぬやうな

同僚のいつもの愚痴や去年今年

朝日浴びダイヤのごとし霜柱

『暮色』てふ句集読み終へ年明くる

冬木立赤き胴着の犬駆ける

国際線のロビー虚ろに十二月

山の宿あふるるほどの柚子湯かな

遙かなる筑波嶺青し初景色

初鏡わが顔どこか余所くし

赤べこの首ゆらくと小正月

銀杏黄葉太宰も眠る禅林寺 三鷹 南場雅子

早師走金団となる豆を買ひ

冬ざれの林の透けて家の見ゆ

凍てし朝一番列車の音硬く 府中 竹村晃子

生きのびし友より届く年賀状

お正月母なき実家遠くなり

落葉踏む足音に翔つひよどりよ 国分寺

冬の園一羽の鳥いういうと

老人ホーム小切りの数の子祝ひ膳

来訪者なき年始乾く俎 国立 阿部幸子

一筋の雨戸の隅に初明り

オンライン押し合ひ替はる孫の賀詞

数へ日や漬物石に庭石を 日野 渡辺八枝子

門松を立てて守衛の一人かな

寒波来るダイヤモンド富士待つ時間

色変へぬ松の傾ぐや碑に 横浜 阿部トキ

磨きぬし薄手グラスや寒日和

初しぐれ垣つくろひしばかりかな

冬日受け大仏様はどつしりと

光あびとび散るもみぢ大櫓

バスを待つ束の間小雪ちらつけり

説教に返事する猫日向ぼこ

ひつそりと鵲来てゐる朝の庭

着膨れて大接近の星探す

ゆつたりと初冬の雲や大手門

中ノあさ子

阿部幸子

渡辺八枝子

阿部トキ

奥野周光

加藤和子

坂本具子

冬桜にひかれ足止む日本橋

落書一杯子供の国の黄水仙

梅雨冷や医院の扉開けしまま柴田雅春

アスファルトに雀のむくろ五月闇

ガード下くぐり抜けたる梅雨の蝶

柵の花より暮るる水の音 鈴木律子

冬の月青菜の浮きし外流し

元朝の空へとび翔つ小屋の鳩

佇みて喜捨乞ふ僧や初時雨 長野高朋

湖につぶらな影やななかまど

風そよと金木犀の香を運び 三木豊子

淑氣満つ墨の香匂ふ写経の間

開け放ち部屋の奥まで初日かな

花八つ手鷗外旧居の片隅に 村上明弘

一服の茶柱の立つ良夜かな

おほかたはこぼす目葉天高し

遠のきぬ昭和の恋や茶の木咲く 川崎青木明代

終活の済みたる部屋に冬日射す

目が合ひぬ掛け大根の内と外 一人去り又一人去り枯芒

裏山の落石とどめ冬木かな 川崎横山ユキ子

行年や余白を残すパスポート

畦道の浅き流れや冬の草

咲ききつてつらつら椿土の上 鎌介佐藤千晴

茶の花や石窯パンの上気して

犬の尾のふさふさとゆく冬日かな

湯煙のつんと香し冬至風呂 茅ヶ崎久保田富士子

元旦の落暉まぶしや富士見橋

バス待ちの列に一声寒鴉 伊勢原長嶋和子

白鳥や声張り上げて水を蹴る

会津塗り朱の枕愛でて年用意

四畳半明るくすなり冬林檎 本島 廣

星空に独り年越す月眩し

雲塊に初東雲の漏れ明り

西空に名残りの月や初茜 山本カツ子

縁台の切干大根日にあづけ

裸木となり大櫛潔し

植込みの高さを揃へ年用意 落葉搔き匂ひ漂ふ雑木林 桑野秋山憲三

高空を煌めき流る落葉かな

田の畦に背をまるめて若菜摘
息災と字の美しき賀状来る 松川 古谷悠紀子

買初は合格祈願の守り札
山の端の宵の満月大みそか

街路樹の電飾灯る年の暮 甲府 江口嘉郎

年新た五年日記の一枚目

静けさに窓を開ければ雪明り

短日や禰宜の袴の擦るる音 静岡 大石弘子

冬天や樵の帯ぶる檜の香

寒四郎南アルプス輝けり

川二本おち合ふ所鴨の声 興津千鶴子

冬日差奥の箆筒にとどきけり

花鋏にこめる力や初稽古

ぼこぼこ何か泡立つ冬の川 杉山紀美子

川べりを真つ直ぐに来て花八手

曇天を突き刺すとき冬木の芽

沢音に重なり揺るる実万両 高橋一夫

冬うらら杉の香にほふ堀に沿ひ

冬蜘蛛へ息吹きかくる子供かな

石段を下るが如く年惜しむ 田中秀幸

冬ざれや富士の頂雲を吐く
けんちんや母の薄味妻継ぎて

百キロの白菜漬くる峡の晴 静岡 筑地裕子
猪を捌く川原に鴉来る

置き去りのタイヤの中に冬董

綿虫の眼鏡に止まる日暮かな 内藤允昭

落石や大谷崩れの冬ざれに

自転車を磨く親子の小六月

芋麻田みなわのままに凍りたり 永田公香

登呂の田へ赤米供へ鋤始

冬枯の庭に鎮座の道祖神 長谷川秀子

たんぽぽの絮が絮追ふ空青し

上げ潮の満ちたる川面春の月

露天湯の岩を離れず春の月 矢野喜久江

墳丘に猪出ると花八つ手

強霜にぐらりと足のとられたり

冬枯や雀のあまた飛び出づる 筑津 小梁洋子

ゆりかもめ漁港の空を狭めたる

昼過ぎの蠟梅の香に客のあり

初御空港に百の大漁旗

短日や最終便の渡船出づ 川巖崎 鈴木裕一

車椅子の母雑炊を所望せり

年輪の浮き出る縁に日向ぼこ

硝子戸に触れて煌く細雪 津 瀬野喜代子

獅子舞に頭囁まるる空青し

ガラス戸の交番の留守シクラメン

帳尻のあはぬ家計簿年の暮 金沢 白村喜久代

裸木となりて伸びのび大櫛

冬の蜘蛛居場所としたるサンルーム

咳をして声かけがたき静けさよ

寄せ鍋の小さき鍋や一人前

背伸びして見上ぐる空の冬木かな

実南天はり戸の我のふと母似

さざんくわや散り敷く紅と咲く紅と

上向きて飲み込むサプリ冬の鳥

京にきて何かなつかし冬日向

万両のただ赤々と水の音

蕪餅の麴をなめて一人暮

夕空の白雲抱き眠る山

箒目の深く正しく竜の玉

樹の瘤のこんもりひかる朝の雪

夕去りて白く浮き立つ枇杷の花 金沢 道場啓子

ふるへ咲く十月桜はせを句碑

片頬に小春日不意に差し来たる

ひと冬を暖炉に焼べる薪の小屋

冬座敷油単のかかる桐箆笥

往来に面する松の雪吊す

雪吊の縄のあはひを抜くる風

老庭師ねぢり鉢巻小雪舞ふ

恙無く日の過ぎゆきて寒の月

背ナまろきマント姿は母なりし

冬紅葉川音高き遊歩道

セーターのビーズのひかりクラス会

夫の墓雨にぬれたる散り紅葉

冬耕の翁 一服幾度も

初氷長靴の子等踏み割れり

芹鍋や競り合ふ芹の青々と 白山

イオマンテ歌ふ少年文化の日

菰巻や半纏並ぶ武家屋敷

月の如ぼつかり浮かぶ柚子湯かな

廣田宏美

松田好子

宮崎恵美

谷内瑞江

鶴尾正江

田上ナツ子

高木艶子

北野陽子

新出祐子

田上ナツ子

高木艶子

北野陽子

山道や落葉踏むがに口ずさみ
猫の髭ぴんと反りたる漱石忌
初あられ双手に受けて走りゆく
衿巻を二重に飛驒の町を訪ふ
時折は時計眺めて毛糸編む
芭蕉堂深閑として冬の梅
掛け大根大根畑に影落す
隠沼の翡翠の色や雪催
道祖神見下ろす山河雪やまず
水涸れて木道の鱗現はるる
谿わたる列車を急かす虎落笛
川底の砂利掻くシヨベル冬枯るる
新たくあん噛む音高し二人住む
析餅や灰汁と餡とのマリアージュ
枯野から真白く見ゆる日も間近か
河豚鍋に河豚ゆつたりと海の宿
虎河豚のはちきれさうな腹見ゆる
綿虫のふはりと句碑の裏荒るる
朱の椀に青菜かぐはし粥柱
荒れ狂ふ越の岬の野水仙

敦賀

大田ふじ枝

大田ふじ枝

川口和代

田嶋豊年

中村秀一

前川千代枝

義士の日や赤穂の塩を墓前にす
山頭火愛でし茶の花いま咲けり
歟の柄をもて大根の畝はかる
風通り良き軒下に大根干す
木守柿空の青きを一人占め
枯葉踏む心地良き音廻り道
極月の高校マラソンテープ切る
屋久杉の香り漂ふ冬座敷
仏壇に供物溢るる師走かな
帆を下ろすヨットハーバー冬ざるる
年の暮遠き昭和の歌流る
はや水に戻つてゐたり初水
凍空を油彩のやうな鳥が二羽
「ああ」と言ひながら呑み込む年の酒
モンゴルの馬走らせて初寝覚
泡風呂に鬼柚子踊る湯治宿
探鳥の足を止めたる冬の虹
子のあとを落葉が滑るすべり台
蔦紅葉雁字搦めの墓一基
寒稽古正座一列足の裏

敦賀

山本一枝

徳島

早苗

山本晴美

山本瑤子

石井

木内マヤ

小松島

岡田あゆみ

田上幸子

歳晩や夜回りの声遠ざかる

蒸し牡蠣は玄海の味二人膳 福岡 園田清子

十年の民生活動去年今年

六階の廊下を走る落葉風

冬の菊五歳児欲すや垣根越し 鶴田輝代

山茶花や工事現場のきはやかさ

冬天に白き半月 鮒干す 那珂川 高山ひさ子

むらさきのかんころ餅の甘さかな

物置の屋根に弾みし初雀

粥に足す庭のはこべら柔らかき 妻叫び狸おどろく街灯下 長崎 下見直哉

山茶花の庭に明るさ広がりて

初霜の音さくさくと朝刊よ 冬の雲戻らぬ人となりにけり 永田美知子

焼藪や軍手昭和の匂ひ立つ

水仙の香りまとひて郵便夫

ひろびろと空まるくなり山眠る 西海 山下敦子

土間に来てぶるつと雪を落とす猫

日向ぼこ乳母車の子を褒め合ひて

灰色の海を真下に石路の花 那珂 砂川道子

元旦や風静まりて濤光る

やや連れてうからやからや鏡餅

薄闇に雪踏む音の響く朝 札幌 石田 睦

リモートで変はらぬ笑顔新年会

玻璃ごしにひしひし迫る夜寒かな 多田陽子

橡の実のひとつひとつにある生命

米寿とやひとまづ終活年賀状 吉田克己

初景色ビル天辺に鴉二羽

冬ざれや唇紅き弁財天 宇都宮 福田 弘

筆始志功の菩薩見おろせり

シヤトルコックの刺さる生垣帰り花 佐野 荒川 進

朴落葉かさかさかさと子の走る

木星に土星寄り添ふ冬至かな 志木 汐見克彦

けあらしの川面佇む鳥一羽

寒稽古迎への車が玄関に 新座 多田英治

老人も拳突き上ぐ寒稽古

霜踏みてごみ出す朝の救急車 千葉 岡野恵美子

幸福の木に花静かなる初春

窓際の席へ弁当照紅葉 船橋 入河 大

もんもんと令和二年の除夜の鐘

初釜やはなびら餅のふつくらと 東京 安藤美酒々

寒稽古丹田からの声を出す

仄暗きどろぼう橋に初雀

国旗揚げ剣道場の松飾り

冬ざれや時を知らせる音幽か

七草の揃はぬ厨粥の湯気

おだやかな年であれかし初日受く

午後の日毛のやはらかにねこやなぎ

クリスマスカード選びぬかへぬ日々

空つぼの庭に一本冬薔薇

日の当たる銀杏金色散り急ぐ

冬空の飯桐の果穂深き赤

御辞儀して忙しく鳴ける尉鶴

笹で像清める古刹煤払

看護師がうがひ促す寒の水

病室の窓枠に雪雪降れば

夕闇の雲をまとひし冬の山

目覚むれば元旦となる薄明かり

初雪や博多の街にも少し舞ひ

北口富栄
藤田信子
本多 葵
豊 美佐子
横浜 大駒 泰子
秦野 秋山 憲三
水 姫路 稲田 勇
福岡 相本 和子
石原 好宏

特集 俳句とひらがな

名句鑑賞と実作から考える
ひらがな表記の魅力、効果的な用法

巻頭作品10句

大竹多可志・茅根知子・戸恒東人
鳥居真里子・西嶋あさ子・長谷川 權
古田紀一・山尾玉藻

俳壇

4月号

3月14日発売
定価900円(税込)

巻頭エッセイ
高田正子

八木健選 滑稽俳壇

四季巡詠33句(第Ⅱ期) ……宮坂静生・柴田佐知子

ものがたりのある俳句 ……堀本裕樹

いきもの歳時記 ……角谷昌子

俳句史を見直す ……秋尾 敏

続々日本の樹木十二選 ……広渡敬雄

俳壇史エピソード ……坂口昌弘

思想としての虚子 ……中村雅樹

俳句と随想12か月 菅野孝夫・柴田多鶴子

本阿弥書店 〒101-0064 東京都千代田区神田猿楽町2-1-8 三恵ビル 電話03 (3294) 7068 振替00100-5-164430

万象作品の佳句

小林 愛子

煤払ふ檀徒揃ひの被り布 中川雅月

新年を迎えるために、一年間の煤を払おうという寺院である。句は「煤払」ではなく「煤払ふ檀徒」と続けたところに、作者の檀徒への厚い眼差しを感じ、信心深い土地柄も想像される。「揃ひの被り布」は仕事への意気込み。また、句形は「煤払ふ檀徒」と続けたことによりめりはりが生まれ、平坦を免れることが出来た。作者は敦賀の人。

産毛剃る頬の乾きや冬深し 北浦詩子

季語の「冬深し」は、一年で最も寒さの厳しい時期、北国は深い根雪に覆われ、雪のない所は無彩色の街並みである。「産毛剃る」のは特別の事ではないが、今回は「頬の乾き」を感じたという。この言葉に冬のひりひりするような空気の手触りがある。寒さの極みと刃物の取り合わせには研ぎ澄まされた感覚。冬のどん底に暮らす人々の鬱屈した心情を垣間見るようだ。作者は札幌の人。

わだなかへ沈みゆく日や寒椿 小坂橋泰山

「わだなか」は「わたなか」とも言い海中と書き、海の中、海上の意。「沈みゆく日や」とあるように太陽は刻々と沈もう

としている。目の前の鮮やかな寒椿も、それに合わせて色を失っていくであろう、今は寒さの一番底である。「寒椿」の季語の本意に迫ろうと試みた。作者は横浜の人。

波除けに波の碎けり三島の忌 本多ひとみ

「三島の忌」は三島由紀夫の忌、愛国忌とも。現代日本の代表的な小説家であったが、昭和四十五年十一月二十五日、自衛隊の市ヶ谷駐屯地に突入、割腹自殺した。四十五歳。

「波除けに波の碎けり」とある波除けは防波堤、海岸堤防などを保護するもので、そこは波が荒く浸蝕の激しいところ、碎け散る波に三島の忌を重ねたのである。ところで物の本によると、「貴族趣味の傾向があった三島は、俗の文芸である俳句にはほとんど関心を示していない。」とあった。しかし俳人はせつせと「愛国忌」を詠んでいる。なかなか興味深い現象だと思ふ。作者は静岡の人。

野良猫の胸にすり寄る冬隣 佐藤幸示

最近、私の廻りは以前より野良猫が少なくなっただと思っている。猫ブームで皆家の中にいるのか、それでも時々庭に糞の土産を見ることがある。句は「胸にすり寄る」とあるので人と猫は同じ高さで接している。人にすり寄る猫であるが、人恋しさは人間の方にも募って来る、何しろ冬は隣まで迫っているのだ。作者は新潟の人。

喜寿なればうす味もよしのつべ汁 高野松風

「のつべ汁」は島根県津和野地方から新潟や奈良ほかの地方に伝えられ郷土料理。里芋を中心に鶏肉、人参、蒟蒻、椎茸

貝柱、竹輪などを醤油味で煮たもの、新潟は上質な里芋が採れるので、とろみを生かして葛はひかない。何かあれば食膳に並ぶ「のつべ汁」であるが、喜寿の祝いに出た薄味のそれはことさら身に沿うものであった。作者は新潟の人。

初富士の便り 裾野の姉者より 鶴田智美

初富士は元日に仰ぐ富士山。静岡、神奈川、山梨、のどの方角からも見えるが、特に江戸から眺める富士を言った。最近の高層建築で様相が変わる。句は初富士の様子を便りで知った。「裾野の姉者より」は姉者とおどけたのだ。懐かしさと瑞祥の気分があふれる。原句は「便りは」。作者は東京の人。

寒晴やびりばり飛びて静電気 宮田千恵子

「寒晴」には身の引き締まるような鋭い語感がある。大気は澄み澄しい寒気のためあらゆるものが際やかに浮かび上がる。「びりばり飛びて」にそうした冴え冴えとした大気を感じる。また、ば行や、ん音を重ねることによって耳からも心地よい句となった。作者は福岡の人。

不揃ひの声張る子らの夜番かな 鈴木隆久

昔から冬の夜は火事に気を遣ってきた。夜番、火の番と言われる組織が、拍子木などを打って町内を回る。甲高い声がばらばらに近づいてくるが、しかし皆元気のよい声である。そうだ今日は子供会の夜番なのだ。「声張る子ら」の実態が目

に浮かびなんとも微笑ましい。作者は佐倉の人。

焚火して焔に踊る小枝かな 中谷由郁

焚火は寒い日に戸外で火を焚くことで、落葉を焚いたり暖

をとり楽しむ。他に農家、社寺、工事現場等があるが、防火の点で現在は狭められている。句は郊外であろうか、火に投げ入れた小枝が「焔に踊る」ようであるという。実証的な表現により焚火の様子がいきいきと伝わる。作者は大和の人。

茶毘に付し聖樹の灯る道帰る 飯塚キミ

「茶毘に付し」は火葬を取り計らうの意。帰りは重い足取りだったに違いない。しかし「聖樹の灯る道」であった。宗教の違いはあるが一瞬なりとも安らぎを感じたであろうか。原句は「茶毘に付す」。作者は栃木の人。以下三句組より

ほこほこと何か泡立つ冬の川 杉山紀美子

冬の川と言えば渇水期のため細々とした流れに視点がつかれ、岸の枯草、浮かび出た中州や石などが思い浮かぶ。しかし目の前の川はほこほこと音を立てている。温泉か、メタンガスか、「何か泡立つ」ているのだ。この得体の知れない川もまた荒涼たる冬の眺めである。作者は静岡の人。

子のあとを落葉が滑るすべり台 岡田あゆみ

句意は明瞭である。子供も落葉も滑ったのであるが、句は「落葉が滑る」と表現した。そのため前に滑った子供の様子を生き生きと想像できる。作者は小松島の人。

初鏡わが顔どこか余所くし 三村紀子

鏡で毎日自分の顔に逢っているのだが、今日は初鏡である。改めて、しみじみ見るわが顔に若さの名残を確信したか、年齢の積み重ねに納得するか、「どこか余所くし」に期待感が透けて見え何か可笑しい。作者は東京の人。

特集

令和の新創刊

＊人と作品
鈴鹿呂仁 句集
『真帆の明日へ』

追悼

有馬朗人

＊好評連載
南伸坊
猫の俳句

＊巻頭三句

高橋陸郎

筑紫磐井
俳壇観測

今瀬剛一

坂口昌弘
忘れ得ぬ俳人と秀句

石田郷子

青木亮人
句の手触り、
俳人の響き

大高霧海

大西朋
俳句へのまなざし

尾池和夫

神作研一
手のひらの江戸
― 古典籍を旅する

長島衣伊子

藤村公洋
俳句のつまみ

＊その時、俳句手帳

波戸岡旭

二ノ宮一雄
一望百里

＊今月の華

高松守信

二ノ宮一雄

阪西敦子

一望百里



Haiku Shiki

2021年4月号

3月20日発売
定価1000円(税込)

http://www.tokyoshiki.co.jp/ 東京四季出版

〒189-0013 東村山市栄町2-22-28 ☎042-399-2180

らて ま

俳句

4月号 予告

3月25日発売
予価(本体846円+税)

特別作品 大木あまり・大串章・恩田侑布子

俳句入門

最初の一句どう作る？

はじめに／準備／基本型・季語・切れ字／作句のポイント
／テクニク／最低限の文語文法／読む力／良書紹介／
用語集／俳句のここが楽しい／五音の季語集

特集

境涯俳句 ― 俳句は生き様

池田澄子・細谷暁々・柘植史子・高山れおな・藤田哲史

日本の俳人100 根岸善雄『潺潺』

▼新作7句 ▼人と作品 ▼一句鑑賞

短編俳句小説 宮部みゆき『ほんほん彩句』

角川俳句賞作家の四季(春) … 岩田奎

俳人協会 各賞発表！

※内容は変更になる場合があります。

電子版同時発売！ 電子版は「BOOK☆WALKER」(<https://bookwalker.jp/>)など電子書店で購入できます。

発行 角川文化振興財団 発売 株式会社KADOKAWA <https://www.kadokawa.co.jp/>

同人会の今後について 同人会会長 柳澤宗正

今年4月の同人会総会の中止に伴い、同人会の現役員の任期が1年延びたこと、従って今年4月から向こう1年間、現役員がこれまで通りの業務を粛々と進めていくことも、3月号のこの欄でお知らせした通りです。

そこで今回は今後の同人会の在り方について、触れておきます。ご承知の通り、「万象」は創刊以来、少子高齢化の影響を受けて会員数が年々減り、創刊20周年を迎える今年、会員数はほぼ半減し、財政上も厳しくなっています。このような現状においては、やはり同人の皆様には会員を増やすよう、また出来れば一人一句会を持って頂くよう、これまで以上にご尽力頂きたいと思えます。

次に、同人の高齢化による活動の鈍化を踏まえ、同人会の業務と組織の簡素化が必要になっています。事務局で検討し、昨年末幹事の方々の同意も得て同人会を発展的に解消する案を纏めました。詳しくは別の機会に譲りますが、要は同人会を解散し、「万象俳句会」の組織の中に「同人部」（仮称）を設け、同人の慶弔と同人名簿の改定業務等に当たるという案です。また検討すべき点は多々あり、最終的には主宰や万象会議の承認が必要ですが、任期が一年延びたこともあり、引き続きベストの案を検討していきたいと思っています。

珈琲ぶれいく

11



【問】今回と次回は形容詞の活用について勉強します。

文語文法の形容詞には「ク活用」と「シク活用」がありますが、今回勉強するのは「ク活用」です。「高し」「白し」「良し」のような形容詞です。

動詞「なる」を付けたときに「高くなる」のように「く」となるものが「ク活用」の形容詞です。形容詞にも活用形があり、「く、く、し、き、けれ、〇」となります。〇は命令形の活用形がないことを表します。

次の句の（ ）の中から正しいものを答えましょう。

雪解田に空より青（し、き）空のあり 篠原 梵

「青し」は終止形、「青き」は連体形です。掲句は一句一章で、「青い空がある」というのですから、この後の「空」という名詞に繋げなければいけません。正解は「き」。

妻の額に春の曙はや（き、かりき） 日野草城

昭和9年、俳壇の内外に物議をかもした「ミヤコ・ホテル」と題した連作十句からのものです。破調でしょうか？

掲句に用いられている「はやし」も「ク活用」なのですが、この場合のように、下に助動詞（ここでは過去を表す「き」）が付くと、「カリ系列」と呼ばれる活用をします。

この活用形は「から、かり、〇、かる、〇、かれ」となり、〇は終止形と已然形の活用形がないことを表します。助動詞「き」は活用する言葉（＝用言）の連用形に接続するので、正解は「かりき」。破調の句ではありませんでした。

「万象」同人句会報

(二月例会に替えて通信句会) 45名

内海良太主宰選

七種の芹はいつももの庭の隅 広瀬俊雄
 ジーンズのポケットに鍵年新た 名和政代
 純子句碑肩まで加賀の深雪かな 江見悦子
 白鳥来風の荒川晴れわたる 島野ひさ
 鱒走る薪の切口寒の入 柳澤宗正
 大寒やコロナ禍に閉づ「川甚」も 山本とく江
 川を見に出でて御慶を交したり 西本才子
 蠟梅にでくはしマスク外しけり 柳澤宗正
 休園の門扉の中に江戸椿 岡村純子
 括らむとすれば抗ふ破芭蕉 山本右近
 とび出してルルルと静か寒卵 加賀葉子
 初空や鳶とき色の風にのり 三屋英俊
 グラウンドに白鳥のごと成人祭 吉中愛子
 ④鷹匠橋渡る木の香や恵方道 山本とく江
 今年の恵方は南南東。作者はこの方角の社寺へ参詣したの
 だろう。道の途中に架かっていた橋の名は「鷹匠橋」。まだ木
 の香の残る架け替えられたばかりの新しい橋らしい。橋の名
 や「木の香」に、新年に相応しい目出度い言葉の響きがある。
 ⑤夜が明けて聖樹の星の落ちてをり 三澤治子

クリスマスイブの祝祭を過ごした翌朝、部屋に飾った聖樹の天辺の星が流れ星になって床に落ちていたというもの。多分お孫さんと一緒にイブを過ごしたのだろう。即物的でやや滑稽味のある句となっている。

小林愛子副主宰選

一両車枯野の果てに消え行けり 佐藤晴子
 百合の樹に梯子のかかる四温かな 吉中愛子
 白鳥来風の荒川晴れわたる 島野ひさ
 納豆の糸をまはして四温かな 榎本文代
 獣めく根上り松や冬ふかし 久保村淑子
 三越のライオン像の大マスク 島野ひさ
 ⑥頬被取り喪の列を見送りぬ 澤 照枝
 「頬被」で、荒涼たる冬の畑などが想像される。処々に青菜畑が見えるかもしれない。年齢もそう若くはないであろう。村を貫く道に葬列が見えてきたので、敬意を表したのである。かつては花嫁が入ってきたこともあり、この道で村は繋がっていた。そんな懐かしい時代を思い起こさせた句である。

江見悦子選

竹櫓大きき 撓む懸大根 丸本祥夫
 百合の樹に梯子のかかる四温かな 吉中愛子
 一人居へ傘寿の祝ひ寒卵 下嶽孝一
 明日ありと信じてかじる冬林檎 山田春生
 納豆の糸をまはして四温かな 榎本文代

三越のライオン像の大マスク 島野ひさ
 ④括らむとすれば抗ふ破芭蕉 山本右近
 季節によつて、芭蕉くらい変化の激しい植物を他に知らない。夏にはみずみずしかった大きな葉も風雨にさらされ、冬にはざんばらに破れて始末に負えなくなる。括つてまとめようとすることがなかなか手ごわい。老いてなお矜持を保ち、大勢に迎合することなく己を保つ、超然たる老人のように。リズムカルで軽やか、含蓄に富む句。

吉中愛子選

街を朱に大つごもりの夕日かな 大橋雅子
 老人に老人の夢冬花火 小林愛子
 床の間に富士と朝日や草石蚕かむ 沢辺たけし
 泉境をつつみ込みたる寒落暉 草間三香子
 冬晴や地獄のぞきへ手を引かれ 古川京子
 初富士の影美しき茜空 南雲秀子
 ⑤金柑を載せてをさまる鏡餅 加賀葉子
 毎年の事だが、さて鏡餅は立派なのを買ってきたのだが、のせるに丁度良い橙がない。三方だけは嫁入り道具の一つとして持参した立派なのがある。が満足できる三方を飾ることはない。掲句の「金柑」とは面白い。意味は様々あるがこれが良いのだ。

内田郁代選

若き日の日記に秘密雪女郎 三屋英俊

遠き灯のにじむ川面や曇くる 江見悦子
 獣めく根上り松や冬ふかし 久保村淑子
 括らむとすれば抗ふ破芭蕉 山本右近
 梅東風やかたかた囃す祈願絵馬 山本右近
 赤き実に鴨の来てゐる寒日和 榎本文代
 ⑥カミユの忌の過ぎて自肅の掘炬燵 内海良太
 「カミユの忌過ぎて」でいいと思う。忌日は1月4日。貧しい家に生まれ、若くして交通事故で逝つたカミユ。取合せがいい。彼の人生に掘炬燵の穏やかな暖かさがあつたらどんなに良かっただろう。自肅の措辞で、彼の生きた時代と今の混沌とした世相も現わされている。

名和政代選

百合の樹に梯子のかかる四温かな 吉中愛子
 二人して漁網繕ふ冬日和 大橋雅子
 遠き灯のにじむ川面や曇くる 江見悦子
 裸木や大島浮かぶ水平線 佐藤嘉洋
 退院や喜び色の冬すみれ 疋田華子
 括らむとすれば抗ふ破芭蕉 山本右近
 ⑦大仏の頬のゆるみや春隣 恒川清爾
 一月の通信句会は新年の季語が少なかった。それはコロナ禍の影響なのであろうか。春隣の季語を特選にいただいた。おおらかに詠まれている。大仏にすぎる思いと春隣に希望をたくす思いが出ている。

広瀬俊雄選

豆腐屋の灯の冴返る朝まだき 内海保子
 烏骨鶏の寒の卵を両の掌に 赤堀洋子
 一人居へ傘寿の祝ひ寒卵 下嶽孝一
 冬怒濤岩に打ち上げ鶴の翔てり 西本才子
 注連縄を結界となし疫籠もり 山本右近
 古文書に災禍の知新春隣 大久保進
 ④大寒やコロナ禍に閉づ「川甚」も 山本とく江
 新型コロナウイルスの感染は、世界的にも多大な影響が出
 ている。これも、その一つである。江戸時代から続く川魚料
 理の老舗「川甚」の閉店をテレビで知った。「寅さん」で知ら
 れる柴又にあったので、知っている方は多いと思う。時代の
 変遷の恐ろしさを痛感する。

沢辺たけし選

消防の点呼響くや寒の朝 久留島規子
 罽走る薪の切口寒の入 柳澤宗正
 大寒の風に胸張る秋田犬 佐藤嘉洋
 納豆の糸をまはして四温かな 榎本文代
 目白来て一呑みしたる実千両 内田郁代
 初空や鳶とき色の風にのり 三屋英俊
 ④ジーンズのポケットに鍵年新た 名和政代
 「鍵」は家の鍵か、自動車の鍵か、それとも金庫の鍵か、何
 の鍵でもよいのだが、それを「ジーンズのポケットに」、ごく

日常的なことである。しかし、「年新た」という季語が、この
 句にはドラマチックに作用している。ジーンズの若者のこれ
 からの行動、チャレンジに対して「鍵」が重要な役割を果た
 すのではないかとさえ思えてくる。

中村千久選

焚火跡白き燠なる木の根つこ 内海良太
 二人して漁網繕ふ冬日和 大橋雅子
 罽走る薪の切口寒の入 柳澤宗正
 赤き実に鴨の来てある寒日和 榎本文代
 三越のライオン像の大マスク 島野ひさ
 冬晴れの岬に干さる魚籠と傘 佐藤晴子
 ④大寒の空へ鴉のワンと鳴く 砂地宏子
 冬の鴉は枯木に止まる姿が画材となり句材となつてきた。
 「寒鴉」といふ季語もある。掲句は冴えざえとした大寒の空
 を背景にした漆黒の鴉なのだが、下五が意表を突く。頭の良
 い鳥で、他の動物の鳴き声を真似たりもする。それを聞いて、
 躊躇わずに「ワン」と鳴かせたところがおもしろい。

三屋英俊選

頬被取り喪の列を見送りぬ 澤 照枝
 真つ白な飛翔眩しき初山河 奥 太雅
 納豆の糸をまはして四温かな 榎本文代
 獣めく根上り松や冬ふかし 久保村淑子
 老人に老人の夢 冬 花火 小林愛子

三越のライオン像の大マスク 島野ひさ
 ④カミュの忌の過ぎて自粛の掘炬燵 内海良太

この一年、新型コロナナへの恐れから列島挙げて外出自粛。この間悪疫等の書かれた『方丈記』やカミュの『ペスト』等読んだ人も多いと聞く。作者も『ペスト』を読み共感したのだ。カミュの忌日は1月4日。彼を思いその忌日を句に取込んだ発想がいい。籠居中の「掘炬燵」との取合わせもいい。

中央句会4月例会に替えて通信句会4月20日投句締切

5月例会はありません。(通信句会も行いません)

同人句会4月例会はありません。(通信句会も行いません)

今回の(通信句会)は5月20日投句締切です。

万象基金のご報告

榎本文代	一〇・五口	高田たみ子	五口
山本右近	一〇口	匿名	五口
匿名	四口	島野ひさ	一〇口
匿名	一口	(令和3年1月25日~2月17日・受付順・敬称略)	
松浦陵保	一口	「万象」発展のため、大切に	
伊藤美音子	五口	に使わせて頂きます。	
匿名	二口		
高木艶子	四口		

万象俳句会

有文社の句集発行について

句集名 著者名 句集名 著者名

風の中	和気佐和子	星月夜	丸川房子
朴開く	上野立火	芭蕉の葉	福田雅子
ミサの鐘	佐々木颯々子	螢火	井上篤子
歳月	釜谷石瀬	青嶺	内海良太
白樺	和気佐和子	青葉木菟	中島八起
遊行柳	猪鼻純枝	水中花	小谷治子
水郷の風土	高木良多	白萩	正木喜美代
猪垣	鈴木國夫	草雲雀	原田しずえ
向日葵	志茂思水	蛸	冲山志朴

句集の印刷についてのお問い合わせがあります。右は弊社で刊行した句集の一部です。

「万象」「春耕」「山繭」の皆様にご好評を頂いております。句集のご相談は有文社までどうぞ。

有文社(多田) ☎042・475・0436

または050・3573・3177

東 西 南 北

消 息 等

内海良太主宰、小林愛子副主宰、江見悦子編集人の句、「くぢら」2月号「受贈俳誌美術館」に掲載

落し文拾ひし徑に戻しおく 内海良太
真つ白な筆買ひに出る雁の頃 小林愛子
含羞の君カトレアに埋もれて 江見悦子

主宰の句、「たかなな」2月号「近着受贈各誌主宰・代表の一句」に掲載

にぎやかに白雨走り来走り去る 内海良太
沖繩から嬉しいお知らせ2件

○前田貴美子さん、二〇二一年度沖繩県俳句協会功労賞受賞

○中本清さん、第42回琉球俳壇賞受賞
琉球新報の琉球俳壇への昨年一年の投句を通して上位入選の実績を基に賞を受けた。お二人のご活躍と受賞、大変おめでとございます。益々のご健吟を祈ります。

阿部月山子さん（鶴岡）の十句、「俳句界」2月号の特集「みちのく俳人競詠」に掲載

松例祭木箱より出す兎面
コロナには勝てとあまはげ建びけり

初市に並べる臼を削りをり

周平の記念館照る大どんど

高砂で終はる初能映の里

かまくらに窓接室のありにけり

銀行に大黒舞の小槌振る

かせどりの四百年をかつかつか

地酒酌む寒鱈汁の腸甘し

ちよこれいと色の花壺寒葵

山下敦子さん（西海）の句、朝日新聞

長崎版の俳壇で田中俊廣選の2席に入選

選評と共に紹介する。(2021・1・13)

金槌を肩に山行くほほかむり

山芋つまり自然薯を掘りに行くのであ

らう。傾斜地の堅い地面は大きく深く掘

らねば長芋は途中で折れる。労力のいる

難作業。寒風を防ぐ手拭いの頬被は、今

ではどこかユーモラス。

句会紹介

静岡「季節風」同人鍛錬会、令和2年

12月5日大里生涯学習センターで開催

例年は吟行を中心に行なうて来たが、今

回はコロナ感染予防のため句会のみ。雑

詠5句と兼題「冬の日」「ストーブ」の計

7句の投句。参加者18名。「万象」同人の

句は次の通り。

玄関に蜜柑一山ごんぎつね

お歳暮を包む昭和の町の絵図

早曉の寒禽の声透き通る

遠嶺に釣瓶落しの残りけり

線状の葉の勢ひや水仙花

牛蒡注連仕上げは軽く床を打ち

袖子の香の僅かにしたり仕舞風呂

冬の日は縞をうねらせ虎ねまる

襟巻のはし心臓に届きけり

古書店の帳場へ届く冬日差

尾根径や狛犬の頬血の飛沫

青空に確かな力十二月

ご 案 内

俳人協会第60回全国俳句大会開催 協

会員の皆様には既に案内が届いていると

思いますが、一般の方も投句できますの

でご案内致します。

◇募集 二句一組(未発表作品。旧かな。)

◇投句料 一組につき千円

◇締切日 4月15日(木)

投句した方全員に、作品集が届きます。

例年一万句を超える句が集まる大会です。

「万象」からも、奮って参加しましょう。

(報・江見悦子)

新規会員を紹介します

姓 号

郵便番号 〒

住 所

投句者住所 〒

投句者姓号

電話

あとがき

▽今月号から第二十巻、「万象」は二十年目に入りました。新しく同人になった9名の方の作品をお届けします。主宰の選を経た、力漲る競詠作品に、俳句のもつ力を再確認しました。

4年前から始めた、主宰、副主宰、万象作品選者、顧問四名の皆さんの一句鑑賞が今月号で終わりました。延べ人数192名の方の文章は、俳句と作者に迫ろうとした、優れた鑑賞文ぞろいでした。有難うございました。(江見)

▽新型コロナウイルス対応のワクチン接種が始まりました。疫病の憂いのない生活ができるよう一日も早く接種したいものです。句会などの行事に活気が戻る日を待ち望みます。(茂)

▽自粛生活が長くなつて、自由時間だけは存分にあります。そんな中、長谷川權『決定版一億人の俳句入門』を読みました。惹句に曰く「この一冊であなたの句が変わる。五七五、切れ、季語の理由を知れば自在に詠める。初

心者から上級者まで必携の書」と。納得の一冊でした。(千久)

▽冬の後には春が来る。当たり前のことですが、長いコロナ自粛の続く中、世界中で「春」の訪れが待たれています。もう少しの我慢です。(規子)

▽「君はいつ書いてくれるの?」と飛高先生。「4月号で...」どの句?」「銀河鉄道を...」それは楽しみだ...書き上げた直後の訃報。無念。そのまま先生の棺に入れさせて頂いた。一句鑑賞シリーズが終わった。(英俊)

▽原稿をお願いした各支部の新年俳句会は、全て通信句会でした。夫々に工夫され、これからの句会のあり方の参考になります。(純)

▽「万象」20周年へ向けて、準備が進められています。20年の間に、大切な方々が鬼籍に入られました。お教えを乞いたい方々ばかりです。編集の末席で、何とか務めておりますが、皆様はどう見ておられるでしょうか?(郁代)

会員を募ります

会員は左記の会費(誌代)を前納していただきます。
一年分 一、〇〇〇円
半年分 六、〇〇〇円
会費の納入は左記の振替をご利用ください。新会員は必ずその旨明記。
郵便振替口座00230・0・103581
万象俳句会

住所変更届・退会届等については、必ず封書又は葉書にて、左記へご連絡いたします。
〒284・0015 四街道市千代田1-7-10
塗木翠雲

万象 四月号

第二十巻 第一号
通巻 第二二九号
令和三年四月一日 発行

主 宰 内 海 良 太
発行人 江 見 悦 子
編集人

〒168-10072
東京都杉並区高井戸東一-31-16-603
万象発行所
☎〇三-六三三-四一五七九六

「万象」創刊二十周年記念

第十九回万象俳句賞作品募集

万象俳句賞は毎年一回、広く作品を募り優秀作を表彰、「万象」俳句の向上、発展に資するもので、多数の応募を期待いたします。尚、本年度の万象俳句賞は「万象」創刊二十周年記念俳句賞を兼ねるものいたします。

作品 一人二十句、未発表新作に限る

四百字詰原稿用紙の体裁（B4判）とし、冒頭欄外に題名を記入のこと
一通（コピー可）提出。（原稿は担当者が活字化し、コピーしたものを選者に送ります。）末尾欄外に住所、姓号を明記のこと。

他のものを同封しない。封筒に「万象俳句賞応募」と朱書のこと

選者 内海 良太 小林 愛子 福島せいぎ 山田 春生 江見 悦子

松原智津子 亀田やす子 神田美穂子 井村 和子 前田貴美子

応募資格 「万象」同人、会員に限る

締切 令和三年六月二十日到着分までを有効とする。

宛先 〒168-0072 東京都杉並区高井戸東一-三-161603 万象発行所

入賞発表 「万象」十月号。全国俳句大会で、作品一席に万象俳句賞を贈る